

岩手大学地域防災研究センター
第31回地域防災フォーラム

いわて発 高校生による 地域防災・復興

～次世代が考える新たな災害文化～

講演録

2025年8月7日(木) 13:30～16:30

岩手大学理工学部キャンパス内 復興祈念銀河ホール・オンライン配信



岩手大学
地域防災研究センター



目 次

開会挨拶	3
岩手大学地域防災研究センター センター長 小笠原敏記	
第1部 高校生活動報告	5
「スノーバスターズに学ぶ地域力～若者が担う西和賀の防災～」.....	7
西和賀高等学校 2年 高橋奈央 高橋咲	
「宮古水産高校で実施した防災教育と生徒会交流の報告」.....	13
宮古水産高等学校 3年 菅原柊夜 2年 三上結楽	
「学生の防災意識を高めるための避難訓練のあり方」.....	18
大槌高等学校 3年 阿部豊 伊藤凱	
「夢団がつなぐ未来～命を守る防災のバトン～」.....	24
釜石高等学校 3年 加藤柊音 山陰皇騎	
第2部 パネルディスカッション	31
高校生が考えるこれからの防災・復興活動	
コメント	51
岩手大学教育学部附属教育実践・学校安全学センター 副センター長 本山敬祐	
岩手大学地域防災研究センター センター長 小笠原敏記	
閉会挨拶	59
岩手県教育委員会事務局学校教育室 産業・復興教育課長 佐々木宏幸	



第31回 岩手大学地域防災フォーラム

いわて発 高校生による地域防災・復興 ～次世代が考える新たな災害文化～

東日本大震災発生から14年以上が経過し、震災発生当時の記憶がほとんどない高校生が大震災をふまえた防災・復興活動を行っています。また、県内全域を対象とした「いわての復興教育」の推進により、内陸部等の学校においても防災や復興に関する新たな取り組みが始まっています。こうした高校生の取り組みを通して、防災や復興に関する先駆的な活動を教育関係者や市民、中学生や大学生等にも広く知っていただき、あらためて防災教育、復興教育について考える機会となれば幸いです。

2025 8/7 [木]
13:30～16:30 (開場 13:00)

岩手大学理工学部キャンパス内
復興祈念銀河ホール
および
オンライン同時開催

参加無料
【事前申込制】

■プログラム

開会あいさつ 岩手大学

第1部 高校生活動報告 13:35～14:35

- 西和賀高等学校 「スノーバスターズに学ぶ地域力～若者が担う西和賀の防災～」
- 宮古水産高等学校 「宮古水産高校で実施した防災教育と生徒会交流の報告」
- 大槌高等学校 「学生の防災意識を高めるための避難訓練のあり方」
- 釜石高等学校 「夢団がつなく未来～命を守る防災のバトン～」

第2部 パネルディスカッション 14:50～16:20

高校生が考えるこれからの防災・復興活動

閉会あいさつ 岩手県教育委員会

お申し込みURL



■参加お申し込みの方へ

- ・申込期限は 8月1日 (金) 正午までの受付となります。
- ・次のURL (Google Form) からお申込みください。<https://forms.gle/WepHmKD4ixHEZX1Z6>
- ・オンライン参加の方には、接続するZoomのURLを開催前日までにお申込み時のE-mailアドレスへお知らせいたします。
- ・今回のフォーラムは、(公財)トヨタ財団 2022年度国内助成プログラムにより実施します。

■主催：岩手大学地域防災研究センター

■共催：岩手県教育委員会

■協力：岩手大学教育学部附属教育実践・学校安全学研究開発センター

■問い合わせ先：岩手大学地域防災研究センター E-mail: rcrdmf@iwate-u.ac.jp 電話: 019-621-6448



開会挨拶

第 31 回地域防災フォーラム

「いわて発高校生による地域防災・復興～次世代が考える新たな災害文化～」

<日時>2025 年 8 月 7 日（木）13：30～16：30

<場所>岩手大学復興祈念銀河ホール・オンライン配信

【岩手大学 坂口】「あと 5 分ほどで開始となります。そのまま皆様お待ちください。改めてまたご案内させていただきますが、皆様、携帯電話マナーモードになっておりますでしょうか？今一度、確認をお願いいたします。そしてお話しされる、今日は高校生たちが全部で、8 名が登壇してくれます。高校生たちの撮影をしたり、それを SNS に掲載したりというのはお控えくださいますようによろしくをお願いいたします。なお、終了後、アンケートへの協力も併せてよろしくお願い致します。あと数分で開始となります。皆様着席のままお待ちください。」

【坂口】「オンラインでご参加の皆様、間もなく開始となります。今一度、携帯電話など壇上の皆様はご確認をお願いします。今日は高校生たちが、この日のために日々時間を重ねて発表の準備をしてくれました。途中で音が鳴ると非常にちょっと残念な気持ちになりますので、改めて携帯電話がマナーモードになっているかご確認をお願いします。こちら来場の皆様への案内となります。個人撮影、動画の撮影、それを SNS などに掲載するというのはお控えください。オンラインでご参加の皆様、ミュートになっておりますでしょうか？改めてミュートになっているか、オンラインの皆様、ご確認をお願いします。そして来場者、オンラインの皆様、共通のお願いがございます。終了後、アンケートへのご協力をよろしくお願い致します。」

【坂口】「それでは皆様、改めましてこんにちは。ただいまより第 31 回岩手大学地域防災フォーラム『いわて発高校生による地域防災・復興～次世代が考える新たな災害文化～』と題したフォーラムを開始とさせていただきます。開会の挨拶でございます。小笠原敏記岩手大学地域防災研究センター長よりご挨拶させていただきます。」

開会挨拶 岩手大学地域防災研究センター センター長 小笠原敏記

【小笠原】「皆さんこんにちは。本日は大変お忙しい中、岩手大学地域防災研究センター、防災フォーラムに参加していただき、誠にありがとうございます。また、日頃の防災への支援と協力、それに対して岩手県教育委員会並びに各高校の先生方に改めて感謝を申

し上げます。岩手県は、先日のカムチャッカ地震、それから東日本大震災、そういったところで津波の危険があったり、あるいは3月に発災した森林火災、あるいは昨年8月に盛岡でも発生した線状降水帯、豪雨災害など。あと冬はかなり雪が降る豪雪地帯もあります。なので、地域特有のそれぞれの災害があったり、そういった中で高校生の皆さんが日頃防災に意識を持って活動されていることに、非常にありがたく思っております。今日はその成果をですね、思う存分発表する場にあるかと思います。かなりこう、内容もいろいろ幅広いことになっていて、我々も楽しみにしております。まあ緊張するかもしれませんが、精いっぱい頑張って発表してください。我々も楽しんで聞きたいと思います。それでは本日よろしく願いいたします。」

第 1 部 高校生活動報告

【坂口】「本日は第一部と第二部に分けて開催となります。これより第一部、高校生活動報告に移ります。今日は県内から4つの高校の皆さんが、日頃の活動について報告してくださいます。西和賀高等学校、宮古水産高等学校、大槌高等学校、そして釜石高等学校この4つの皆さんでございませう。なお、発表は一学校につき15分ずつとなります。ベルが3回なります。終了の3分前、終了の1分前、そして15分になった時点の合わせて3回となります。3回目のベルが鳴りましたら報告終了となります。今日はですね、オンラインでいろんな方々が参加してくださっています。遠くは静岡の学校の方も参加してくださっておりますので、非常にこの岩手での取組、各学校オリジナルの取組に興味を持ててくださっている証だと思います。決して発表の皆さんにプレッシャーをかけているわけではありませんが、このプレッシャーを乗り越えるように元気に発表をお願いいたします。それでは、まず1つ目の報告となります。西和賀高等学校より『スノーバスターズに学ぶ地域力、若者が担う西和賀の防災』と題しまして、2年生の高橋奈央さん、そして高橋咲さんよりご報告いただきます。よろしくお願ひします。」

「スノーバスターズに学ぶ地域力～若者が担う西和賀の防災～」

西和賀高等学校 2年 高橋奈央 高橋咲

【西和賀高等学校】「岩手県立西和賀高等学校から参りました2年高橋奈央と高橋咲です。よろしくお願ひします。

西和賀町は2005年に湯田町と沢内村が合併して誕生しました。岩手県の西、秋田県との県境にあり、日本有数の豪雪地帯です。雪による重みで家屋が倒壊したり、家が雪に閉じ込められ、買い物や通

院ができなくなったりすることもあります。数年前には学校の体育館の屋根から落ちた雪によって、窓ガラスが多数割れたりする被害もありました。

町は高齢化が進んでおり、高齢世帯にとって雪かきは大きな負担となっています。そこで、住民や中高生などが参加する雪かき支援ボランティア“スノーバスターズ”が組織され、1993年から30年以上活動を続けています。今では県内外に同じような組織が



たくさんできましたが、西和賀町が発祥の地とされています。私たちは地元出身のため、中学生の時から活動に参加してきました。

昨年度の除雪希望登録世帯数は 65 世帯、ボランティア登録人数は全 23 地区で 260 人、12 月から 3 月まで月 1 回、合計 4 回

活動をしました。これは 12 月 22 日の出動式の様子です。中高生を中心に 90 名が参加し、町長から激励のご挨拶をいただきました。昨年度は積雪が多く、この日にはすでに 50 センチメートルの積雪があり、出動式後、活動をしました。これから実際に放送されたニュースをご覧ください。」

【ニュース映像】

【キャスター】「豪雪地帯の西和賀町で、地元の高校生などがお年寄りの住宅の除雪をボランティアで行う今シーズンの活動が今日から始まりました。西和賀町ではおよそ 30 年前から、住民や中高生などで作るボランティアが、“スノーバスターズ”として希望するお年寄りの住宅を回って除雪を行ってきました。今シーズンは今日が最初の活動で出動式が行われました。」

【ボランティア①】「雪はらいに困っている人たちを少しでも安心して生活できるようにお手伝いができたらいいと思います。声がけを通して元気をお届けできることを誓います。」

【キャスター】「この後、21 のグループに分かれて担当の地区に向かい、除雪に取り掛かりました。太田地区では、お年寄りの住宅の屋根から落ちた雪が 2 メートルほどの高さになっていて、メンバーがスコップやスノードンプを使って取り除いていました。」

【ボランティア②】「すごくやりがいのある活動だと思っています。次回もしっかり除雪できるように頑張りたい。」

【ボランティア③】「地域の方とコミュニケーションをとれる一つの行事だと思うし、何よりも困っている人を助けることができるのはすごく嬉しい。」

【西和賀高等学校】「西和賀高校は小規模校ですが、昨年度スノーバスターズに

西和賀町のスノーバスターズ

令和6年度

- ・除雪希望登録世帯数 65世帯
- ・ボランティア登録人数 23地区260人
- ・12月～3月 月1回 合計4回活動



登録した生徒は45名で、全校生徒105名の43%でした。地元出身者だけでなく、北上から通学している生徒や、県外出身の寮生も積極的に参加しています。参加した生徒に対して、このような自由記述のアンケートを取ったところ、35名の生徒が回答してくれました。まず、スノー

スノーバスターズのアンケート

①スノーバスターズに参加した理由

- ・地域の人の役に立ちたい
- ・高校が普段から様々な支援をいただいているので恩返しをしたい
- ・除雪の大変さを知っているから

バスターズに参加した理由ですが、一番多かったのは地域の人の役に立ちたいから、というものでした。高校は普段から様々な形で支援していただいているので少しでも恩返しをしたいという意見も多かったです。また、町内の生徒からは、除雪の大変さを知っているから、という意見もありました。次に、参加してどう感じたかという質問には、お年寄りや体の不自由な方々の力になれていると達成感を持った、という意見が多く、町全体の人にもっとしたいという気持ちを広めたい、という意見もありました。また、県外生からは、規格外の積雪量に困惑したという感想もありました。スノーバスターズの取組についてどう思うかという質問には、地域の人たちと関わるいい機会になっている、雪による事故を少しは減らせる、多くの人が協力し合える場ができる、お年寄りの安否確認ができる、などの意見がありました。最後に、また参加したいかという質問には、全員がまた参加したいと回答していました。

西和賀町の広報にも大きく取り上げられ、生徒たちのやる気につながっています。雪かきは雪が重く、かなりの重労働で大変ですが、誰かの役に立てているということに達成感を得られ、地域の方と関わり、協力し合える良い関係が生まれ、町の活性化につながると感じました。

町の社会福祉協議会によると、スノーバスターズの活動は除雪作業だけを目的として

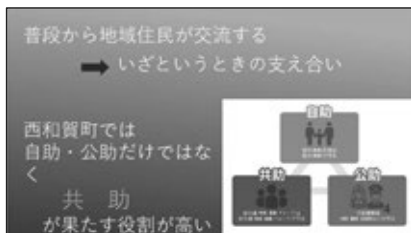
いません。高齢者の冬場の安否確認や閉じこもり防止、地域住民の支え合いを目的に挙げています。ですから、必ず除雪作業の前に、住人の高齢者に声をかけて交流するようにしています。

学校で毎年行っている防災教室では、西和賀町は山に囲まれているため、土砂災害や和賀川の氾濫による浸水被害が想



定されているということを教わりました。学校周辺の防災マップを見ると、学校の裏山から土石流が起こる可能性もあるということです。ここが学校で赤い記号は土石流の危険を表す記号です。普段から地域住民が交流することで、いざという時、支え合うことができます。過疎・高齢化が進む西和賀町では特に災害時には自助・公助だけでなく、共助が果たす役割が高いと考えます。

スノーバスターズの活動は、地域力が高まり、雪による災害だけではなく、様々な防災にも役立つと考えます。特に私たちのような高校生が中心になって、その役割を果たせるよう、生徒会活動などを通じて呼びかけていきたいと思っています。以上で発表を終わります。ありがとうございました。」



【坂口】「ありがとうございます。いいですか？私からいくつか質問しても。とても興味深い報告本当にありがとうございました。今日改めて、私も岩手に住んでもう30年近く経つんですが、スノーバスターズが1993年、30年以上にわたってやってるっていうのを、今日はちゃんと知ることができました。お二人は何年前ぐらい、いつぐらいから、まあ学校を通してだけじゃなくて、こういう活動に参加してきたんでしょう？」

【高橋咲】「スノーバスターズ自体が対象として中学生以上となっているので、私たち地元組は中学生から行っています。」

【坂口】「なるほど。実際やってみて、大変だったな、ちょっとこれ難しかったなっていうエピソードってありますか？」

【高橋奈央】「雪が重いので、スノーダンプみたいなものを使ってやるのもかなり体力とかが必要なので、そこに毎回苦戦しています。」

【坂口】「その中で今日、今ご報告にもありました地域のコミュニケーションの場になっている、というお話がありました。すごくここが大変興味深かったです。実際、お一人暮らしの方々もたくさんおられるわけですね。そういった中で、こういう雪かきしながらそこで暮らしている方たちとの、どんなコミュニケーションとか、話をした、声をかけられた、なんていう話がありましたら、聞かせてください。」

【高橋咲】「最初に挨拶をしてから、『体調はどうですか?』など、高齢者の方の体調を聞いて、最初に軽くコミュニケーションを取ってから作業に移っています。」

【坂口】「なるほど、そうなんですね。じゃあそうすると必ずピンポンって押して、そこで少し雑談をする。で、だいたい作業時間はどのぐらいやるんですか?まあの時にもよると思うんですけど。」

【高橋咲】「多いところだと2時間半ぐらいかかることもあります。」

【坂口】「結構西側ですから、雪がもうずっと降り続けている中、やっぱりやるってこともあるわけですね。そういう時にそこで暮らしている方は、年配者の方だから一回家に入ってたったり、またはずっとそばで見守っていたりとか、『童たち頑張ってるな』って言って外で見てたりなんてこともあるのかな?」

【高橋奈央】「時々、私の地区がやっている方は出てきてくれて、みかんだったりとかをくれたりとか、いっぱい学校の話をしてたりとか、合間合間でコミュニケーションを取ることができるので、はい。」

【坂口】「なるほどです。そうすると、その各家々でこのこの辺は、例えば一人暮らしの方とか、足の悪いばあちゃんが1人で暮らしてる、とかっていう各家のいざ何かあった時に手をかけるっていうことが必要だっていうのも、やっぱりスノーバスターズの活動を通して見えてくるわけですね。なるほどです。改めてこういう活動をしてみて、こういうところ本当に良かったな、やって良かったなっていうところを、お一人ずつ聞かせていただいて、まとめにしたいと思います。」

【高橋奈央】「私はあまり積極的にコミュニケーションを取りに行くような人じゃないんですけど、今回スノーバスターズを通して、かなり年上の方が多いんですけど、たくさん話しかけてくれるので、自分も話を通じて学ぶことが多いので、自分も誰かに対して積極的に声をかけるような習慣がついてるなっていうのを感じたので、その雪かきっていう作業だけでなく、コミュニケーション能力はやっぱり強化されたなっていう感じがします。」

【高橋咲】「コミュニケーション能力っていうのがあったんですけど、実際にスノーバスターズでコミュニケーションを取って、その場で会話してて、他の地区の行事とかで

も、見かけたりしたら声をかけてくれることも多々あって、そこで地域力っていうなんか支え合いができていって自分は感じています。」

【坂口】「なるほど、ありがとうございます。本当に住民で地域を守って、いざという時に備え、何かあった時にお互いの命を守り合うという部分の機動力という部分を発揮するための日々の積み重ねというのが、このスノーバスターズの活動を通して積み上げられているのかなと思いました。そういった意味で行くと、その地域防災の基本の部分っていうのをまさに実践している活動だなと思いましたし、今言う、地方がどんどん弱まっていったって言われているんですけども、あの西和賀高校のこのスノーバスターズの活動を通して、小さくても強靱な地域コミュニティづくりっていうところをまさにやっている、今日はそんなご報告を伺うことができました。本当にありがとうございました。ご報告いただきました。西和賀高等学校2年の高橋奈央さんと高橋咲さんでした。皆さん、大きな拍手をお送りください。いっぱい質問してすみませんでした。ありがとうございます。」

【坂口】「続いて二番手となります。宮古水産高等学校より、『宮古水産高校で実施した防災教育と生徒会交流』の報告をしていただきます。本日もご報告いただきますのは、今ご登壇いただきましたお二人です。3年生の菅原柊夜さん、そして2年生の三上結菜さん。このお二人が報告をしてくれます。今スライドの準備をしております。しばらくお待ちください。

では準備できました。お願いします。」

「宮古水産高校で実施した防災教育と生徒会交流の報告」

宮古水産高等学校 3年 菅原柊夜 2年 三上結実

【宮古水産高等学校】「宮古水産高校海洋生産科3年菅原柊夜です。食物科2年三上結実です。よろしくお願いします。

はじめに学校の紹介をさせていただきます。本校は今年度で創立130周年を迎える日本で一番歴史のある水産高校です。現在は海洋生産科と食物科の2つの学科に分かれて学習しています。海洋生産科

は1年生の時はクラス分けをせず、全員で普通教科や専門教科の学習をします。2年生以降は船の操縦や機関の運転等を学ぶ船舶運航コース、魚介類の生産、加工、販売までの内容を学び、水産の6次産業化を目指している食品資源コース、この2つのどちらかを選択し、分かれて専門教科の授業・実習を行います。船舶運航コースでは、船の操縦や機関の運転を学び、2年生になると2カ月間のマグロはえ縄実習のため船でハワイまで行きます。こちらが出航式の様子です。食品資源コースでは、水産の6次産業化を目指し、魚介類の生産から加工、販売までを学び、缶詰やかまぼこを作り、各種販売会にも参加します。今年度の130周年記念式典では、記念のラベルデザインで缶詰を配布しました。食物科は1年生から3年間かけて調理の基礎・基本や専門的な知識を学び、技術を身につけ、調理師免許の取得を目指します。1年生では調理の基本を学びます。そして2、3年生になると、集団給食実習で大量調理を学ぶために先生方に給食を提供します。また、船舶調理実習では、船の上での調理を経験することができます。

次に、本校の3.11の時の様子を紹介します。本校はこのように海からほど近い場所にあり、普段立ち入ることのできない屋上からはこのように海が見えます。そのため、東日本大震災の際には、このように校庭にはがれきやゴミが流れ着き、周辺の地域も甚大な被害を受けました。校舎はかろうじて浸水を免れましたが、当時勤務していた先生方や生徒は近くにある宮古市立河南中学校に避難したそうです。

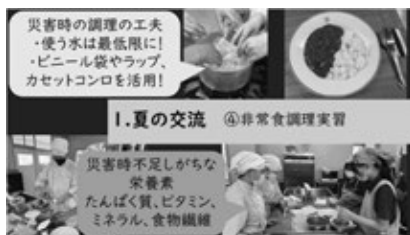
それでは本日の発表内容です。一つ目は西和賀高校との生徒会交流事業について。二つ目は令和6年度に行った防災教育について。以上二点について報告いたします。



①西和賀高校との生徒会交流。この交流会は、海のある宮古と雪のある西和賀に住む高校生が交流し、互いに理解を深めるという目的のもと、26年前に始まりました。本州最東端の宮古市から岩手県と秋田県の県境に位置する西和賀町は、直線距離で約106キロメートル離れてい



ます。そのため、宮古と西和賀では生産物や観光資源だけでなく、自然災害に対する意識や備えも異なります。例年、夏は西和賀高校生が宮古市を、冬は宮古水産高校生が西和賀町を訪れて交流を行っています。昨年夏の交流会は9月17日、18日に行われました。食品加工体験では、本校食品資源コースの先生方から指導を受けながら、サバの缶詰作りを体験し、普段見ることのできない食品加工の裏側を知ることができました。この日作った缶詰は、冬に西和賀を訪れた際に西和賀高校の皆さんにお渡ししました。缶詰を作った後は、学校にある釣り竿を持って学校近くの海で釣りをしました。魚は釣れませんでした。西和賀高校の皆さんに宮古の海を体験していただくことができました。2日目の最初は、本校家庭クラブで行っている活動の一つである固形燃料作りを、食物科の生徒が中心となりながら行いました。日々の調理実習で大量に出る廃油と、職員室から出るシュレッダーゴミを使い、固形燃料やキャンドルを作っています。こちらは災害時に活用できるよう現在も研究中です。固形燃料作りの後は、非常食調理実習をしました。このサバカレーは、災害時に不足する栄養素であるタンパク質、ビタミン、ミネ



ラル、食物繊維を摂取できるよう食材を工夫し、サバやミックス豆、トマトを使用しました。また、災害時の調理では使う水を最低限に、使い回しできるようにする、洗い物を増やさないためにビニール袋やラップを活用する、ガスや電気が使えない時はカセットコンロを使う、な

どの工夫が必要であるため、ビニール袋やラップを使ったり、湯煎で米を炊いたりしました。普段から調理実習をしていますが、災害時には違った工夫をしなければならないことを学ぶことができました。今年の1月20日、21日に実施した冬の交流では、まずそれぞれの学校についての情報交換会を行いました。テーマは『①学校で実施しているボ

ランティア活動』、『②学校の魅力をどうやったら広く知ってもらえるか』です。この二点について、これまでの活動を振り返ったり、やってみたいことを考えたりし、お互いの学校のアピールポイントや地域の特徴に気づく機会にもなりました。その後、雪の積もった外で雪あかりをつくりました。雪あかりづくりは豪雪地帯でのイベントとして人気だそうで、宮古に住んでいる私たちにとっても腰より上まで積もった雪は新鮮で夢中になって作業をしてしまいました。情報交換会でのグループごとに作業し、個性的な作品が出来上がりました。2日目は湯田スキー場で雪合戦やそり滑りで交流を深めました。そり滑りではまっすぐに滑ることが難しく、想像以上に盛り上がりました。また、リフトに乗ってスキー場の頂上まで行くことができ、そこから西和賀町の景色を見渡すことができ、改めて地形の違いを感じることもできました。

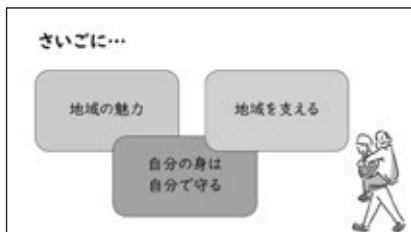
②令和6年度の防災教育について。昨年度はこのような日程で防災教育を行いました。本日は特に宮古市防災訓練に参加した時の様子と、津波・火災を想定した避難訓練について報告します。宮古市防災訓練は旧赤前小学校を会場として行われました。学校から離れており、集合



が難しい人は学校に登校し、二手に分かれて防災訓練を行いました。旧赤前小学校に集合した班は、市の職員の方から指導を受けながら、テントや簡易ベッドの組み立て、土嚢づくりを体験した後、支援物資を運ぶドローンや消火活動の実演を見せていただきました。普段から訓練をしている方々の動きは機敏で、訓練の大切さを感じました。本校に集合した班は、避難所設営の練習やダンボールベッドを体験したり、ドローンの操縦体験をさせていただきました。学校が避難所になることもあるかもしれないので、今回の経験を活かし、少しでも力になれるようにしたいと思いました。毎年4月に行う津波避難訓練では、宮古市立河南中学校への避難訓練をします。東日本大震災の時は早いところで、地震発生から15分で津波が到達したそうです。本校の避難経路は校門から河南中学校まで350メートル。約5分で歩くことができる道のりですが、教室から昇降口まで出てから坂を上らなければならないため、もう少し時間がかかります。津波が震災時より早く到達する可能性もあります。少しでも早く避難できるよう訓練を重ねたいと思います。昨年9月に行った火災避難訓練では、校庭への避難をし、その後にシューターを使う練習をしました。シューターは全員が体験することはできませんでしたが、体

験した人は『3階から降りることが思っていたより怖かった』、『シューターの中をスムーズに降りることが難しかった』と話していました。緊急時、命を守るために使わなければならないものですが、練習が必要そうだと感じました。

最後に、今回西和賀町を訪れてみて、豪雪地帯に住んでいる人たちは雪害対策をしつつ、雪を観光に活かしながら共生していることを知りました。しかし振り返ってみると、宮古市でも海は大きな観光資源となっているので、自然の魅力を



活かしながら生活していることは沿岸も同じだと気付く機会になりました。また、昨年度の防災教育では、宮古市防災訓練への参加や、校内での避難訓練を通して防災意識を高めることができました。今後も学校での学びや様々な活動に参加し、災害が起きた時に自分の身を自分で守るだけでなく、地域を支えられる知識や技術を身につけたいと思います。以上で発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。」

【坂口】「ありがとうございました。一つだけ質問させてください。とても興味深かったのが、防災訓練の中でも、津波・火災、あと土砂災害とかでしたっけ？これ三つそれぞれに分けて訓練をやったというふうに仰ってました。やっぱりその違いっていうのは、どの辺りにあるというふうに感じましたか？少し難しいかな？ちなみに、これそれぞれの災害によって訓練をやりましょって言ったのは、生徒会の皆さんで発案したのかな？」

【菅原】「多分、生徒会ではなく学校の発案だと思います。」

【坂口】「なるほどです。実際やってみて、簡単なところで結構ですが、やっぱりちょっと違うなと思った点、それぞれお一人ずつ聞かせていただいて閉じたいと思います。」

【菅原】「やっぱり災害が多い地域だと思うので、他のところよりも災害が多い地域だと思うので、災害によってやるものが異なっていることが多かったので、今、具体的にこう何が異なっていたかと



聞かれるとあまり答えが出てこないです。」

【坂口】「ただその災害によって、やっぱりやり方も備え方も違うな、というのを得たということですかね。」

【菅原】「そうですね。」

【坂口】「三上さん何かありますか？」

【三上】「自分は食物科なので、火を使うことが多いので、他の例えば火災以外の災害が起きた時にも、2次災害みたいなものを起こさないようにするためにも知識をしっかりと身につけておきたいなと思いましたね。」

【坂口】「なるほど、ありがとうございました。宮古水産高校の菅原柊夜さんと三上結楽さんでした。大きな拍手をお送りください。ありがとうございました。」

【坂口】「続いては三つ目の報告となります。宮古に続きまして、ここからは三陸沿岸の高校が続きます。三番目の報告は大槌高校です。活動報告のタイトルは、『学生の防災意識を高めるための避難訓練のあり方』ということです。大槌高校といえいろんな活動をしていますので、その中でもどんな活動を今日報告してくれるのか、とても楽しみにしています。ご報告くださる方お二人ご紹介させていただきます。大槌高校3年の阿部豊さん、そして伊藤凱さんお二人となります。それではお願いします。」

「学生の防災意識を高めるための避難訓練のあり方」

大槌高等学校 3年 阿部豊 伊藤凱

【大槌高等学校】「それでは『学生の防災意識を高めるための避難訓練のあり方』というテーマで発表させていただきます。よろしくお願いします。まず自己紹介をさせてください。大槌高校3年の阿部豊と伊藤凱です。私たちは総合的な探究の時間を中心に、防災について研究しています。その中で、校内に防災自治組織“バイスタンダーズ”を立ち上げました。本日はこの3本立てで発表していきます。



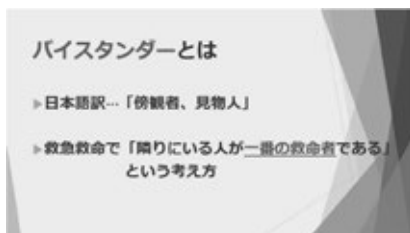
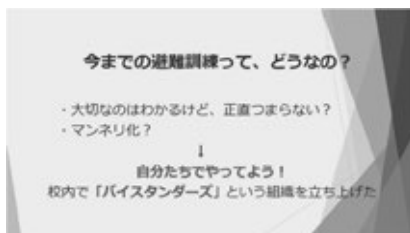
まず、「Ⅰ 避難訓練に至るまで」の紹介に入りたいと思います。これまで私たちが行ってきた探究活動は大きく分けてこの3つとなります。まず、私たちは大槌町にある安渡地区という場所と大きな関わりを持っています。安渡地区は、大槌町の中でも川と海に面している場所に位置しています。そんな安渡地区では東日本大震災の際、足腰が弱く、移動が遅い高齢者が多数逃げ遅れたという事実があります。同じことを繰り返さないよう、この安渡地区ではリアカーの利便性を広める活動をしています。

リアカーと聞くと、物を載せて運ぶイメージが強いと思うんですけど、それ以外にも災害時には人を乗せて避難をするという使い方もあります。私たちもリアカーの存在を広めたいと思い、安渡地区の運動会で防災リレーというものを企画し、実行しました。これはリアカーを組み立てて、人を乗せてゴールするまでのタイムを競う競技となっています。

次に県外での取組を知りたいと思い、『全国防災ジュニアリーダー育成合宿』というものに参加をしました。ここでは防災意識の高い同年代との交流で強い刺激を受けることができました。ここでの取組を発表するため、今年の3月に行われた世界防災フォーラム 2025 というものに参加をしました。これには海外からも多くの人が参加をしていたので、世界での取組を多く知ることができました。これまでの活動で感じたこととしては、岩手を飛び出したことで、様々な取組を知ることができました。特に、ジュニアリーダー育成合宿で出会った同世代の意識の高さに感化されました。しかし、防災意識の高い生徒は積極的に活動に参加しているけど、学校全体で見ると、生徒全員が高い意識を持っているわけではありません。そこで、人の持つ防災意識には差があるのではな

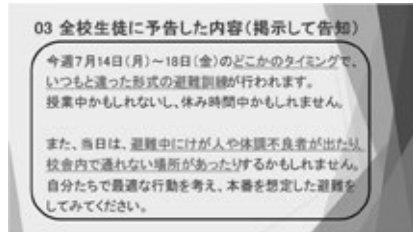
いかと考えました。では、どうしたら防災意識の差を埋められるのか？そして学生にとって身近な防災とは何か？と考えたところ、もっとも身近な防災は避難訓練なのではないかと考えました。避難訓練を思い浮かべた時、ジュニアリーダー育成会宿で知り合った三重県にある暁中学校・高等学校さんが『生徒が考える避難訓練』という面白い取組を行っていることを思い出しました。これを大槌高校でも真似してみたいと考えました。ここで皆さんにも考えながら話を聞いてほしいんですけど、今までの避難訓練ってどう思いますか？大切なのはわかるけど正直つまらないと思うことはありませんか？それは小学生の頃から同じような内容を行ってきたことでマンネリ化が進んでいるからではないでしょうか。これを改善するために、私たちは校内で“バイスタンダーズ”という組織を立ち上げました。ここで“バイスタンダー”の説明をさせてください。

“バイスタンダー”とは救急救命の考え方、隣にいる人が一番の救命者であるという考え方です。そして防災には自助、共助、公助という3つの助があることは皆さんもご存知だと思いますが、“バイスタンダー”とはこの共助に重点を当てた考え方となっています。この共助の感覚を養うことをサポートするため、“大槌高校バイスタンダーズ”というものを立ち上げ、現在全校生徒のうち13名で活動をしています。



ここからは、“バイスタンダーズ”による生徒創造型避難訓練の取組を紹介していきたいと思います。ということで、『Ⅱ避難訓練 実施の記録』についてです。まず、コンセプトとしてリアルな災害を想定し、臨機応変に行動する力や共助の感覚を身につけることをコンセプトとしておきました。従来の避難訓練と比較すると、従来の避難訓練では何月何日の何時間目、地震の避難訓練を行います、のように具体的な日時や内容を知らされてから実施されると思います。さらに、先生の指示に従い決められた避難経路を通ると思います。ここで今回予告した内容を紹介します。『今週のどこかのタイミングで、いつもと違った形式の避難訓練が行われます。授業中かもしれないし、休み時間中かもしれません。また、当日は避難中にけが人や体調不良者が出たり、校舎内で通れ

ない場所があったりするかもしれません。自分たちで最適な行動を考え、本番を想定した避難をしてみてください。』というように予告しました。コンセプトの中にあった『臨機応変に行動する力』は、日時が知られていないなどのイレギュラーへの対応で培われ、共助の感覚としましては、けが人や体調不良者への対応で養われると思います。先生方への共有については、今回の避難訓練は先生方にも参加していただきたいと思い、すべての情報を共有する先生を限定し、先生方にも避難訓練内容を伏せた状態で行いました。日時は伝えていましたが、その授業の時間は教室には行かず、職員室にいてもらいました。けが人や体調不良者役が出ることは伝えていましたが、通行止めの場所があることは伝えていませんでした。次にギミック紹介です。ギミックは校舎内に通行禁止箇所やけが人・体調不良者の設定をしました。まず通行禁止箇所についてです。こちらは従来避難訓練の避難経路図です。赤い丸で囲われているものが今回の避難開始場所です。例えば3階の教室からは一番近くの階段を下って行き、1階に着きます。この後に矢印に従って生徒昇降口を抜け、校庭に行くという経路ですが、この生徒昇降口前の通路を通れなくすることで、どのようなイレギュラーへの対応をするのかを見るようにしました。次にけが人や体調不良者についてです。1年生が右足の損傷、2年生が過呼吸による移動困難と左足骨折で、3年生が両足複雑骨折、てんかん、眼球損傷です。こちらのギミックが当日どのようなのかというと、通行止めについては雨が降ってしまったため、残念ながら中止となってしまいました。けが人・体調不良者への対応については、各クラスおおむね良好でしたが、1名取り残されてしまうという確認がありました。では、当日の避難訓練の様子をご覧ください。」



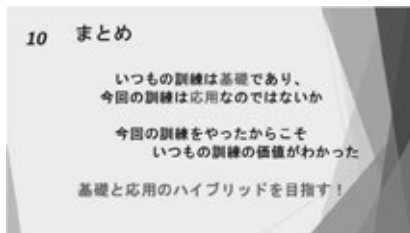
【避難訓練動画】

【大槌高等学校】「今ご覧になったように、けが人や体調不良者に対して車椅子などを持って来たりしている人もいたので、共助の行動ができているなと感じました。訓練の流れについてです。昼休み終了後、5校時開始時、予定通り先生方は職員室に待機してもらいました。その直後、地震発生放送が鳴り、1分後に避難指示の放送を流し、避難を開始しました。避難は約8分で完了しました。その後、各教室に戻り、振り返りを

行いました。振り返りの様子については、一番前に立っている人は先生ではなく、パイスタンダーズのメンバーがファシリテーターを行い振り返りをしました。振り返りの結果としては、災害時の避難の意識が高まったかについては、このようになりました。次に、避難困難な人が近くにいた時に助けよう、手伝おうと思う気持ちは大きくなったかについてはこのようになりました。防災の意識が高まったという生徒が94%、共助の意識が高まったという生徒が96%と、100%ではなかったが狙いは達成できたのではないかと思います。ここで感想を少し紹介させてください。意識が高まったと答えた生徒は、『いつ災害が起こるか分からない中で、どう対処するべきなのかが分かった』、『先生がいなくても、逃げられるように真剣にやっている人も多かった』、『避難の際にけが人を運ぶところまで考えたことがなく、今回実際に運ぼうとしてみたけれど、力がなくて運ぶことができなかった』というのが挙がりました。逆に、意識が低くなったと答えた生徒はご覧のようになり、『ちょっとふざけてしまった』という感想に関しては、さっきも皆さんご覧になったように動画を見てみて、結構ふざけてるなと感じた人も多いと思います。私も実際そのように感じたので、次回の避難訓練までに改善していきたいと思いました。最後に先生方からも感想をいただきました。ご覧ください。このように実際の現場を想定して訓練を行っていたので、先生方にとってもいい訓練になったのではないかと思います。

まとめに入りたいと思います。いつもの避難訓練では、避難経路や窓の開閉など基本的な行動の確認をすることで、自助の力を身につけられていたと思います。それに対して今回の避難訓練では、自分たちで考えて避難をしたり、周囲を見てけが人がいたらサポートするなど、自助と共助、どちらの力も身につけることができ

ていたと思います。そこでいつもの訓練は基礎であり、今回の訓練は応用なのではないかと考えました。そして、今回の訓練をやったからこそ、いつもの訓練の価値を知ることができました。いつもの訓練の良さと今回の訓練の良さ、どちらの良さも知ることができたので、これらをハイブリッドさせることを目指していきたいと考えています。



最後に『Ⅲ今後の展望』です。一つ目に、全校の防災意識、知識の強化を図るために、夏休み明け始業式にて、今回の避難訓練の振り返りを全校生徒に共有したいと思っています。今回の避難訓練では、症状の中にてんかんの症状があったんですけど、そもそもてんかんについて知らない生徒が多くいると思うのでてんかんの紹介をしたり、毛布担架の紹介をすることで知識の強化を図りたいと思っています。二つ目に、もっと実りのある訓練にするために、訓練内容のブラッシュアップを行いたいと思っています。例としては、停電が起きた状態から避難訓練をスタートしたり、訓練の途中で余震が起きる想定を行ったりすることで、イレギュラーのバリエーションを増やしたいと考えています。3つ目に、もっと発展させるために高校で避難所運営体験を実施したいと考えています。これは、実際に大槌学園で行っていることを高校にも取り入れたいと考えています。東日本大震災の際に、私たちの先輩も運営の補助をしたという話を聞いたことがあります。さらに先週、岩手県でも津波警報が発令されたと思うんですけど、自分も課外授業で学校に来ていて家に帰ることができず、高校で一夜を明かしました。大槌高校は大槌の中で第2避難所に設定されているので、多くの人が避難をしてきた場合、自分たちも運営の補助をしていたと思います。しかし、私たちには運営の補助をした経験がありません。なので、実際にやろうと思ってもその時はできなかったと思います。もともと避難所運営体験自体はやりたいと思っていましたが、今回の件を通してさらに行いたいと感じました。最後になりますが、今回の取組は三重県暁中学・高等学校さんの取組がなければ行うことができませんでした。この場を借りて改めてお礼を申し上げたいと思います。今後の“大槌高校バイスタンダーズ”の活躍にもご期待ください。ご清聴ありがとうございました。」



【坂口】「ありがとうございました。お二人はたしか復興研究会にも入っていましたよね。はい。いろんな活動をしているのは私も常々存じ上げています。そして“バイスタンダーズ”。これは初めて聞きました。ちょっと面白い取組だなと思いました。ちょっとよくわからなかったところがあったので、補足説明いただいてもいいですか？毛布担架っていうのと、あとそのある種の仕掛けとして、こういう症状がいざという時に起こり得るかもしれないというので、てんかんの方が出てしまったというのを想定に置いたという話がありました。その最初の部分と、そういういざっていう時のパニックに

なった時にも対応を少しみんなで共有したいという思いでやったのか、そのあたり聞かせてください。」

【阿部】「そうですね、さっき毛布担架の話があると思うんですけど、毛布担架はその例えば震える時とか冬の時とかですと、ブランケットとか持っている生徒も多いと思うので、そういうのがあればできます。例えばてんかん、今回の場合はてんかんで倒れてしまったりする時に、担架がその場にあれば全然いいんですけど、もしその場になかった場合にそういう代用品で安全な場所まで運ぶということができていうことで、紹介したいと思っています。」

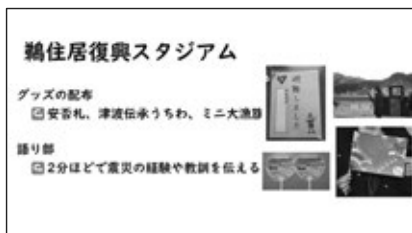
【坂口】「なるほど、ありがとうございます。大槌高校といえば、本当に東日本大震災の後、報告にもありました避難所として非常にいろんな活動をしてきた。その後、いろんな展開をしてきて全国的にも注目された学校の一つです。それだけに、大槌高校に所属していればいろんな防災とかそういった活動ができるだろう、という前提で外から見られがちっていうところがきっとあるんだろうと思います。たぶんそういった中での二人にいろんな問題意識が端を発して、いろんな活動への展開になっているのかなというふうに思いました。報告自体はなんだか学会の発表を聞いているぐらい非常に面白かったです。ありがとうございました。大槌高校の阿部豊さん、そして伊藤凱さんでした。大きな拍手をお送りください。」

【坂口】「ありがとうございました。さあ、続いては最後のご報告となります。大槌の一つ南に位置します釜石高等学校からです。こちらも今、活躍が大変注目されています夢団の登場です。タイトルは『夢団がつなぐ未来～命を守る防災のバトン』と題してご報告くださいます。報告してくださるのは釜石高等学校3年生です。加藤祢音さん、そして山陰皇騎さんです。お願いします。」

「夢団がつなぐ未来～命を守る防災のバトン～」

釜石高等学校 3年 加藤柊音 山陰皇騎

【釜石高等学校】「これから私たちの発表は始めます。釜石高校3年山陰皇騎と、同じく3年加藤柊音です。よろしくお願いします。私たちは“夢団～未来へつなげるONE TEAM”という名前で活動を行っています。私たちが行っている夢団は、学校の部活とか学校の中に所属しているチームではなく、釜石高校の有志の生徒によって結成されたチームです。なので、学校の活動とは全く別で行っています。まず、夢団とは何か。夢団はラグビーワールドカップ2019が釜石市の鶴住居復興スタジアムで開催されることをきっかけに、当時高校生だった太田夢さんの呼びかけにより設立されました。震災の記憶を持つ最後の世代として、今でも活動を繋いでいます。

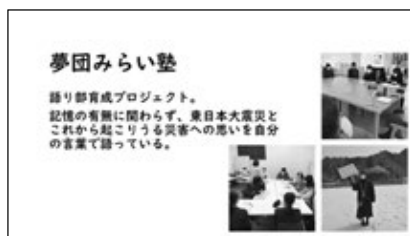


夢団の活動紹介をします。夢団の主な活動に関しましては、鶴住居復興スタジアムの活動です。これは釜石のラグビーチームである釜石シーウェイブスが試合がある時に行っています。ここでは夢団のオリジナルグッズである安否札や津波伝承うちわ、ミニ大漁旗などの防災グッズを配ったり、高校生が2分ほどで震災の経験や教訓を来場した人に聞いてもらっています。このグッズと、あと夢団のパンフレットなんですけど、受付の方に置いてありますので休憩時間やお帰りになる際に、よければ持って帰っていただけるとありがたいです。

次に『防災きずな学園』です。これは、ぼうさいこくたいが横浜で行われた際に行った活動で、東日本大震災の教訓を次の防災に活かすをテーマに行っている釜石の夢団と、未災地で防災の普及活動を行う学生団体 Genkai と、それぞれで研究を行っている大学生など様々な視点から、これからの大災害に備える術を模索するというテーマで行ったものです。ぼうさいこくたい 2023in 横浜や仙台防災未来フォーラム 2024 に出店するために、共同で坊主めくりという防災ゲームを開発しました。その他にも様々な活動を行

っていて、先ほど紹介したぼうさいこくたいや仙台防災未来フォーラムなど、あとは最近では能登に研修に行ったり、様々な高校との交流会も行っています。

夢団には4つの班があります。その班の紹介をしていきます。まずはゲーム班です。このゲーム班は小中学生をターゲットに、楽しみながら防災を学ぼうという班です。防災というところか難しかったり、分かりにくいイメージがあると思うんですけど、このイメージを払拭するために、楽しみながら学べるゲームというところにフォーカスして活動を行っています。また、これまで行った活動としては、防災すごろくであったり防災カルタ、あと先ほど紹介した坊主めくりをこれまで作ってきました。今後としては、先ほど他の高校さんでもあったんですが、体を動かしながらできるゲームっていうのをこれから作成していく予定です。次に防災食班です。防災食を普段から親しめるようなレシピを考案しています。これまではパンの缶詰を使ったラスクであったり、カンパンを使ったチョコボール、ボンカレーのアレンジなど、様々なレシピを考案してきました。これからは、今後予定されている防災ボランティア研修や親子間キャンプなど、様々なイベントに向けて新たなレシピを考案しています。次に動画班です。動画班は夢団の活動の紹介動画を作ってSNSに発信して、外に夢団の活動を広げています。現在、インスタグラムに載せる夢団の紹介動画について検討を行っていて、tiktokの利用なども検討しています。最後に釜石版クロスロードゲーム班です。まず、釜石版クロスロードゲームとは？っていうところなんですけど、これは東日本大震災の時に様々な場面、実際に釜石市民が迫られた究極の選択というのを問題形式にして、参加者の皆さんになぜ



そのように考えたかを話し合ってもらい、考えを深め、とっさの対応や状況判断を訓練するゲームとなっています。クロスロードゲーム班はこのゲームを日々ブラッシュアップしています。最近では、この問題を作るにあたって百年史というものを参考に問題を作っていたんですが、

ある程度作り終わったということで、これからは今後釜石で起こり得ることを想定してゲームを作っていく予定です。

次に夢団みらい塾なんですが、これは班とは違い、先ほどの鶴住居復興スタジアムで行っていると言った語り部を育成するプロジェクトです。記憶の有無に関わらず、東日

本大震災とこれから起こり得る災害への思いを 2 分間で高校生が自分の言葉で語っています。

私からは、先ほどこよつと話があった能登研修について説明したいと思います。私たち夢団は 3 月に能登に実際に行ってきました。目的としては、能登の現状、被災地の状況を知って、そこで学んだことをこれからの夢団の活動に活かす目的で行って来ました。私たちは、生まれも育ちも釜石の子が多く、東日本大震災を



経験はしましたが、当時の状況はもちろん被災後の風景や当時困ったことなどが記憶にないことが多いです。そのため実際にこの目で見て確かめたいと思い、研修に行って来ました。実際の研修内容としては、事前学習として現地の方のお話を ZOOM を繋いで聞いたり、各自行った後の目標設定をしました。実際に現地に行ってからには小木中学校という能登にある中学校と交流をしたり、小木地区だったり、白丸地区という実際に被害があった地区を散策して、地域の方々に災害当時のことをヒアリングして来ました。また、能登高校の生徒との夕食交流会という交流もしてきました。夢団のサポートをしてくださっている伊藤さんの繋がりで、実際に被害があったところに行ってボランティア活動をして来ました。3 月にこの研修を行ったんですが、実際に能登高校の生徒と交流した際に、能登高生の子たちが今度は釜石市へ来て学びたいということで、それが現実となり、先月能登高校の生徒が釜石に来てくれました。その時の活動内容は、大槌町の安渡地区というところの防波堤を見学したり、木碑の見学ガイドをしてもらいました。鵜住居いのちをつなぐ未来館へも訪問し、震災を経験したスタッフの方にお話を聞いたり、伊藤さんにお話を聞いたりしました。また、釜石情報交流センターで夢団の活動紹介をしたり、実際に防災ゲームを体験してもらいました。夕方は夢団メンバーと能登高生で夕食交流会をしました。実際能登に行って研修をして学んだことは、震災があると、今まで当たり前だと思っていたことが当たり前じゃなくなるということ。そして、避難所の生活の在り方ってということについてもすごい考えることができました。また、地域の方々に話を聞いて、災害が起きたときはコミュニティというものすごく大切になるということと、地域のコミュニケーションがどれだけ取れるかっていうことについても、考えることができました。また、実際にボランティアをしてみて、自分たちは被

災地に住んでいるので被災した側の気持ちというのは考えたことはあるんですけど、支援をする人側の気持ちというのを考えたことはなくて、実際に能登に行ってボランティアに参加したことで、支援者側の気持ちを理解することができました。

夢団のこれからについてですが、各班新しいことに挑戦していきたいと思っています。また、夢団はInstagramをしているのですが、これからの活動をもっとInstagramで広めていきたいと思っています。夢団はいろんな団体だったり、学校との交流が多いので、その縁を大切に共に防災の大切さを発信していきたいと思っています。能登研修の報告会もまだできていないので、その報告会も行っていきたいと思っています。

発表としては以上なんですが、まだ4分ほど時間があるので、せっかくなので、語り部を実際に皆さんに聞いてもらおうと思います。お願いします。」

【加藤】「はい。じゃあ語り部いきたいと思います。まず、私が伝えたいことは、私は釜石が大好きだということです。豊かな自然と温かい町の人たち。ですが、時にこの自然が釜石の人々の命を奪います。私は3歳で東日本大震災を経験しました。当時の記憶はほとんどありません。今日は私の両親から聞いた当時のことを語りたいと思います。私は東日本大震災で、祖母・叔母・当時4歳のいとこを亡くしました。3人は住んでいる地域から離れた大町という釜石の中心地のある場所にいました。大町は海から近く、車で逃げようとした人たちが渋滞が起きたそうです。そこで3人は同じ車の中にいるのを発見されました。叔母は妊娠していて臨月であったため、祖母の運転でいとこを保育園に迎えに行きました。その後、病院に向かう途中で津波の被害を受けたそうです。祖母が病院に向かった理由は、入院している体の不自由な家族を心配したためでした。しかし、祖母が心配をしていた家族は助かっていて、今も元気に暮らしています。皆さんは“津波でんでんこ”という言葉聞いたことがありますか？“津波でんでんこ”とは、津波が来たらいち早く各自でんでバラバラに高台に逃げろ、という津波襲来時の避難に



関する三陸地方の言い伝えであり、津波が起きたら家族と一緒にいなくても、逃げていることを信じててんでバラバラに高台に逃げ、まずは自分の命を守れ、という意味があります。“津波てんでんこ”の教えの通り、それぞれが自分の身を守っていれば、祖母も叔母もいとも全員が助かっていたはずです。“津波てんでんこ”の教えがあっても、東日本大震災のような大きな地震が来た時、家族や友達が心配になるのは当然のことだと思います。ですが、みんなも逃げているはずだから自分も逃げなければと、自分と大切な人を信じる事が多くの命を救う一つの道だと私は考えます。冒頭でお話しましたが、私は震災の記憶がほとんどありません。亡くなった3人の記憶もまったくと言っていいほどありません。物心つく時には顔も覚えていなければ名前も知りませんでした。家族に聞くまでは存在すら知りませんでした。それがとても辛いです。ちゃんと会ってみたかった、話してみたかった、叔母のお腹の中にいた赤ちゃんにも会いたかった、そんなことをずっと思っています。私はこれ以上災害で大切な人を失いたくない。それは今、私の語りを聞いてくれているあなたも同じだと思います。だから、今のうちから備えてください。災害が起きた時どうしたらいいか、家族や友達とたくさん話してください。そして自分や大切な人を信じてください。私はこの教訓を次世代に伝え、いつか必ず起きる自然災害で、私のようにつらい思いをする人を少しでも減らしたいと思い、語りをしています。私の語りが少しでもあなたの心に届いていれば嬉しいです。これで終わります。ご清聴ありがとうございました。」

【坂口】「ありがとうございました。祢音さんの語り部、これ語り部は結構何回かやってるんですか？山陰さんも語り部をする時もある？」

【山陰】「いや、自分は語り部はやってないです。」

【坂口】「なるほどです。じゃあ最後に一つずつ、お二人にそれぞれお答えいただきたいと思います。夢団の活動って本当に多岐に渡っていて、かつ、全国のいろんな学校だったり現場と交流しながら、自分たちでどんなことをやっていったらいいんだろうというのを試行錯誤を重ねているのかなと思います。改めて、いろんな方たちとの交流を経て、非常に学んだこと、得たことというのを最後にお一人ずつ聞かせてください。」

【山陰】「はい。まず私は、もちろん釜石に住んでいるので、防災の活動を行う時は、津波とか地震のことをメインに行ってるんですけど、様々な地域の人と防災活動を経て

交流する中で、やっぱりその地域にあった防災活動というものがあるんだと改めて学びました。」

【加藤】「私はいろんな方々と交流する中で、夢団の活動もすごいいろんなことをしていると思うんですけど、話を聞いていく中で、さっき紹介があった Genkai とかと交流して、自分たちがやってないようないろんな活動をしているので、この夢団にも取り入れて活動していきたいなと思います。」

【坂口】「ありがとうございました。釜石高校の加藤柊音さんと山陰皇騎さんでした。大きな拍手をお送りください。ありがとうございます。」

ここまでで第一部終了となります。この後は第二部、一旦休憩を挟んで第二部パネルディスカッションに移ります。パネルディスカッションは『高校生が考えるこれからの防災・復興活動』と題しまして、ファシリテーターは岩手大学地域防災研究センターの福留邦洋教授が務めます。一旦休憩が入ります。キリがいいところで3時にしましょうか？はい、15分ほど休憩をとりまして、3時に再びご着席ください。またオンラインの皆様も3時にまたお目にかかりたいと思います。では休憩とさせていただきます。」

第2部 パネルディスカッション

高校生が考えるこれからの防災・復興活動

【岩手大学 福留】「それでは午後3時、15時になりましたので、第2部のパネルディスカッション、『高校生が考えるこれからの防災・復興活動』ということで始めたいと思います。まずは皆さん、第1部の活動報告お疲れ様です。皆さんそれぞれの高校の活動を紹介してもらいましたが、さっき最後の方で少し感想的な話もありましたが、多分皆さん自身の高校の活動以外に、他の高校を聞いて意外に思ったこととか、自分たちの活動ももっとこういうことが必要かなとか、いろんな感想があったと思います。そういうちょっと感想を聞ければなということと、他の高校への質問だとか発表に対する質問だとか、もしくは皆さん自身の発表報告で少し補足したいことなんかもあると思いますので、最初に少しその発表の補足であったり、他校を聞いての感想だったり、もしくはできれば、他校への質問みたいなものもしてもらえればと思いますけど、よろしいでしょうか？じゃあ最初なので、順番通りに最初に西和賀高校さんのお二人からしてもらえればと思います。お願いします。」

【高橋奈央】「私たちの学校が内陸なので、他の皆さんの発表が沿岸だったので、活動が私たちにとっては新しいなって感じるものばかりだし、大槌高校さんの避難訓練のやつとかは自分たちで、生徒で工夫して作られているっていうのを聞いて、私たちも学校が土石流というのが危ないっていうのもあるので、私たちも機



会があったらまた、私たちなりの形でそういうのを作ってみるのもいいなあっていう新しいアイデアをいただいた機会になったので、すごく、三校ともとても学ばせていただきました。」

【福留】「はい。どこかの高校に質問とかありますか？」

【高橋咲】「釜石高校さんで、能登研修の時、ボランティア活動ってあったと思うんですけど、実際にどんなことをしたのか聞きたいです。」

【加藤】「はい、実際に行った時は6名で夢団参加したんですけど、それぞれの場所に分かれて活動して、一つのところは畑の側溝の泥かきだったり、あと水をかぶったお寺

の掃除だったり、あと納屋の片付け、水害があった地域の納屋の中がぐちゃぐちゃになってたので、その納屋の片付けだったり、あと畑作業とかもしました。」

【福留】「ありがとうございます。じゃあ続いて、宮古水産高校のお二人から、自分たちの発表の振り返りであったり、他校の発表を聞いての感想、もしくは質問があればお願いします。」

【菅原】「はい、まず西和賀高校さんの発表についての感想をまずしていきたいと思います。西和賀高校さんはスノーバスターズのお話だったんですけども、私は今、宮古水産高校に通っている身なんですけれども、もともと出身は秋田県出身で、秋田県の結構雪が降る場所の出身だったので、結構共感しながら話を聞くことができました。スノーダンプを使いながら、お年寄りの大変な家を、雪で困ってる人を助けたいという思いがやっぱり、雪が降るところに住んでる人としてやっぱり共感できて、いい活動だなと改めて思いました。大槌高校の皆さんは、先生からではなくて自分たちから行動して、防災に対しての気持ちを、自分たちだけでなく周りの気持ちも高めたいという活動がすごく多かったので、本当にすごいなと思いました。釜石高校の人たちは、夢団というチームでやっているっていう話だったんですけども、学校からじゃなくて、自分たちでチームを作って、能登の人たちと交流をしたりとか、いろんな災害を、被災してしまった人たちと交流をしたりとかしてる活動を聞いて、本当に県内だけでなく県外とも交流してて、すごい県外と交流してて広く活動されているんだなと思いました。」

【三上】「西和賀高校さんに質問で、雪かきの際にお年寄りの家を訪問していろいろ話したりって聞いたんですけど、そこでお年寄りと話して、それから知り合いになったりしたり、よく関わるようになったよ、みたいな経験もあったりするんですか？」



【高橋咲】「はい、実際に近所とかでもあるんですけど、地域の方とちょっと離れたところにスノーバスターでお邪魔することもあるって、ちょっと遠くの方とも交流ができて、いい機会になってます。」

【福留】「ありがとうございます。それでは、大槌高校の皆さん。」

【阿部】「まずはその比較とか質問をする前にちょっと、自分たちのスライドのちょっと補足の方なんですけど、途中でいつもの避難訓練と今回の避難訓練のよいところをハイブリットさせるっていう話があったんですけど、そこで今、二つのことをやっていて、一つはそのどちらの良いところも合わせて、5と5を合わせて10みたいにするのか、それとも年で2、3回とか避難訓練行われると思うんですけど、それを交互に行って良くするのかっていうその、合わせるか交互にやっていくのかっていうことでちょっと迷っているっていう部分は、その補足というかちょっとした説明にしたいと思います。」

【伊藤】「感想なんですけど、西和賀高校さんが高齢化が進んでいて高齢者に対して非常にいい活動をしていると思うんですけど、私たち、その今後の展望にもあったんですけど、避難所運営をする時に高齢者に対して何か言えることはないかなっていうことをこれから考えていきたいと思いました。以上です。」



【福留】「何か質問あれば。」

【阿部】「質問したいのは、まず私たちの現状としてバイスタンダーズというものが今年の春ごろに設立したもので、まだ新しく人数も集まらないし、歴も浅いものなんですけど、例えば釜石高校さんの夢団とか、2019年頃から行ってること、ながく活動を続けていく上で考えていくものというか、そういうのはありますか？」

【福留】「活動が続いていたり、人を集める秘訣みたいな。大槌高校の皆さんからすると、なぜ夢団はこう、うまく続いて今も人がいっぱいいるのかっていうのをちょっとバイスタンダーズのこれからの参考にしたい、という質問。」

【加藤】「夢団は学校内の活動じゃないっていう説明をしたんですけど、新入生が入ってきた時のタイミングで部活紹介と一緒に紹介をさせてもらって、部活動の勧誘あるじゃないですか。その時に一緒に、部活動に交じって夢団の看板とか持って、『夢団興味ありませんか?』っていうのを、部活動と一緒に声をかけさせてもらって、部活動と違うので、いつのタイミングで入ってきても大丈夫なのでこのチラシ、全体会っていう

のをするんですけど、全体会の近くなったタイミングでチラシとかを各教室に貼ったり、そういうので代をつないでました。」

【阿部】「ありがとうございます。」

【福留】「ありがとうございます。じゃあ、そのまま続けて釜石高校の皆さんから、感想および他の高校への質問をお願いします。」



【加藤】「はい、発表ありがとうございます。それぞれの学校の特徴だったり、地域の特徴を捉えた活動っていうのをどの学校もしていて、すごい興味深い活動が多かったなと思いました。質問なんですけど、全部の学校に質問があって…」

【山陰】「まず大槌高校さんなんですけど、避難訓練、自分たちで企画してるってことだったんですけど、自分たちも『避難訓練のやり方、なんか変じゃない？』みたいな感じの話があって、何日に何時間目にどこどこで、みたいな詳しい説明があって、流れの感じでやってなんとなく終わる、みたいな。なんか釜石高校があって、釜石高校は釜石の中の内陸の方にあるので津波は恐らく来ないんですが、それでもやっぱりやるべきだな、みたいな。いろんな課題を感じる中で今回の発表を聞いて、すごい取組をしているなということで聞きたいんですけど、夢団は学校の一部じゃないので、いい点もあるけどちょっと壁があるというか、そういうところもあるんですけど、学校とどういうふうに掛け合わせて、避難訓練をやったのかっていうところをお聞きしたいです。」

【福留】「どのように学校の先生たちと大槌高校の皆さん、伊藤さんや阿部さんたちが掛け合いというか、打ち合わせをしながら行ったか、というところを、ちょっとヒントというか教えてください。」

【阿部】「はい。端的に言うと、正直先生方とあんまり連携を取ってなくて、それは、スライドの中にあったんですけど、先生方にとっても避難訓練にしたかったっていうのが理由にあって、一応一部の副校長先生とか校長先生とか総務の方とか、総務の先生の方とかとは連携を取ってるんですけど、あとほとんど8割以上の先生には内容は教えずというか、あまり詳しくは伝えずに行いました。大丈夫でしょうか？」

【山陰】「宮古水産高校さんにも質問なんですけど、食品の話があったと思うんですけど、防災食などを作っていたら、これまで作ってきた防災食などがあったら教えてほしいです。」

【菅原】「すみません、僕は食品資源の方じゃなくて、船舶運航コースの方なので詳しくはあまりわからないんですけども、有名なだと、海洋生産科は缶詰とかを作ってるのでそれは、結構長い間保存できるので、一部防災食としてはあたるのかなと思いますね。そんな感じで大丈夫ですか？」

【山陰】「はい。」

【福留】「ちなみに、さっき紹介してもらったスライドの中に缶詰がいくつか写ってたと思うんですけど、結構自分の中でも聞いたことあるというか、知ってるような会社の名前書いた缶詰がありましたが、結構宮古水産高校にはそういった缶詰とかに関係して企業の人と来て、皆さん、高校生の人と一緒に何か打合せしたり、活動してるんですかね？どうでしょう、その辺り。」



【菅原】「食品資源コースの人たちが主に、缶詰作りをしているんですけども、例えば、他の高校が来て、その高校と一緒に缶詰作りを体験したりだとかの活動は聞いたことはありますね。実際にやってるわけじゃないので…」

【福留】「はい、じゃあ、あと質問続けてお願いします。」

【山陰】「最後に西和賀高校さんなんですけど、コミュニケーションのところで質問で、夢田も能登に研修に行った際に、能登のコミュニティの強さっていうのを身にしみて感じて、釜石もやっぱりいざという時のためにコミュニティを強くしていかなきゃなっていう課題点が挙がってきたんですけど、雪かきの時に安否確認だったり体調とかを気軽に聞けるということで、なんかちょっとした会話がコミュニティの強さに繋がっていると思うんですけど、コミュニケーションを取ってコミュニティを強くするためのコツとありますか、ぜひ教えてほしいなと思います。」

【福留】「何気ない関わりの中で、もちろん2人が意識してそういうコミュニケーションを図るっていうのもあるだろうし、意識しなくても結果として後でそういうコミュニケーションが図れたっていうのも構わないと思うんで、少しスノーバスターズを通してこんな繋がりが深まるとか、逆にやってる高校生の皆さんから、西和賀高校の皆さんからすると、こういう繋がりを期待してスノーバスターズに参加してるみたいな感じの紹介をお願いします。」

【高橋奈央】「私はその近所の人とかにいろんな、とにかくしゃべりかけるみたいな、『体の変わりないですか?』とか、『最近何してますか?』とか、なんかふと話してて次頭に思い浮かんだことを聞いてみるとか、そういう些細なことでも結構喜んで答えてくれたり、逆に話しかけてくれることが増えたので、自分の頭に思い浮かんだことをとにかく聞いてみるとか、そういうのも全然大丈夫だと思います。」

【高橋咲】「スノーバスターズで交流してみて、やっぱり些細なことでも話すっていうのも大事だと思いますし、実際にその話してみて、自分の家のおばあちゃんと関わりがあったり、そういうふうな新しい発見とかもあって、毎回楽しんで活動を行っています。」

【山陰】「ありがとうございます。すみません。ありがとうございます。」

【福留】「他に何か、皆さんの間で質問とかそれぞれの高校に対してありますか?ととりあえずはよろしいですか?

じゃあ二つ目として、すでにもう質疑のところでもやり取りがあると思いますけども、今回それぞれの高校から報告してもらった活動内容に関わってですね、皆さん個人として、一人一人として、経験したことを通して何が身に付いたのかとか、何を学んだのかとか、高校を代表してというふうにあんまり背負わずに、皆さん一人一人、個人として何が身に付いたとか、どんなことをまあ思ったとか、勉強したっていうようなことを一言ずつ教えてもらえればと思うので、では今度反対側から、釜石高校の山陰さんの方から発言してマイクまわしてもらおうよう、よろしくお願いします。」

【山陰】「はい、私がこの三年間防災活動をやってきたんですけど、自分が一番、今回のことを含めてですけど、一番伝えたかったことと学べたことっていうのが、語り継いでいく大切さの部分で、人の記憶はいずれ風化していつてしまうもので、震災の記憶は特に風化させてはいけないものだと思うんで、まあ、各地で歴史とか木碑とかいろいろな、語り部とかも、様々な伝承活動みたいなのあると思うんですけど、やっぱりそれ

が基本だし、一番大事だなというふうに思っていて、次の災害に備えて同じことを繰り返さないためにも今回の災害で得た教訓というものを絶やさないようにつないでいくことが大切だなというふうに学びましたし、皆さんにも伝えていきたいなというふうに思っています。」

【加藤】「はい、私は各高校の皆さんの発表を聞いて、さっきも言ったんですけど、地域でそれぞれいろんな活動をしているなと思って、釜石高校は釜石市だけでなく津波の被害を受けない場所にあって、それで活動してるんですけど、これからもっともっとそのことを聞いた中で、活動の幅を広げていけるなあっていうのを発表を聞いて感じたので、これからの夢団をもっと大きくして行って、活動の幅、活動を広げていければいいなと思います。」

【伊藤】「今回の活動を通して、今回の避難訓練だけでなく、今までの避難訓練も大切だなということを学びました。この今までの避難訓練をしていないと今回の避難訓練って、避難経路と車いすの位置とか担架の位置をわかってないと、今回の避難訓練ってできないと思ってるんで、今回の避難訓練と今までの避難訓練を交互にやっていくことが大切だなっていうことを学びました。」

【阿部】「自分は今回のやつで学んだこともそうなんですけど、これから学んでいきたいというのがあって、それは自助と共助のバランスなんですけど、今回私たちのテーマにあった共助の考え、手を取り合って助け合いながら大変な時は命を守っていくと思うんですけど、学校ではやはり自分の命が大事っていう自助の考えを学ぶと思うんです。このどちらも大事だと思うんですけど、そのバランスというのはやはり難しいものがある。それを大学とかこれから学んでいきたいなと思っています。」

【福留】「じゃあ、宮古水産さんお願いします。」

【菅原】「はい、私は様々な防災訓練をすることで、津波でんでんこという言葉があるように、自助や共助なども大切だと思うんですけども、やっぱり最終的には自分を一番、自分のことを一番に考えて動いていくのが一番大切だなと感じました。」

【三上】「本日は釜石高校さんと大槌高校さんと西和賀高校さんの話を聞いて、自分の住んでいる宮古市の高校生みんなと言ったら主語が大きいかもしれないんですけど、自分が知っている中では、高校生、自分の住んでいる宮古市の人たちは少し他校の皆さんに比べて、あまり自分たちでなんとかしようっていう考えが少ないように思うので、こ

れから、率先して何か災害に備えるための地域との関わりとか、そういったものをこれから大事にしていきたいなと思いました。」

【福留】「ありがとうございます。はい、じゃあ西和賀高校のお二人お願いします。」

【高橋奈央】「今回スノーバスターズについて発表させていただいたんですけど、さっきも話したように、コミュニケーション能力っていう大切さと、あと地域力の強化が、スノーバスターズをすることで高まってきていると思うので、これからも町の活性化のためにも、どんどん後輩とかに伝えていって、多くの人にこの大切さとか知ってもらいたくなって改めて思いました。」

【高橋咲】「はい、この機会以内陸と沿岸の取組を知れたし、私も実際に生徒会活動で宮水の交流授業に参加して、いろんなことを、避難訓練のことや非常食の作り方も学べたので、このような機会とかで、自分の学校とかでもいろいろ取り組めること、参考になったので、今後に活かしていきたいと思います。ありがとうございました。」

【福留】「ありがとうございます。前の方だけだと、皆さんフロアの方もフラストレーション溜まるかと思うので、ここで会場の方やオンラインを通しての方から質問だとか、手短な感想も含めてですね、自由に募りたいと思います。何かご質問とか高校生への呼びかけなどありましたら、お願いしたいです。いかがでしょうか？…あ、お願いします。」

【岩手大学 本山】「岩手大学の本山と申します。まず、1 個目に宮古水産高校さんにお尋ねしたいんですが、あの固形燃料についてです。あれって作るのはいいいんですけど、学校の中で実際に活用される場面があるのかな？ということが一つと、何か今クラブ活動で研究中というお話ありましたが、どういうことを研究されているか、もしご存知であれば教えてください。」

【三上】「はい。固形燃料については、自分が知っている限りでは、文化祭で、作ったものを置いてそれを来場したお客さんに持って行ってもらう、みたいな活動をしていたような気がします。今研究していることについては、すいません。そこはちょっとよくわかりません。」

【本山】「本学の家庭科を専門とされている先生とぜひ共有したいお話だなと思って質問させていただきました。2 個目は大槌高校の避難訓練についてご質問させていただきました

ます。生徒発案の避難訓練、とても素敵だなと思いました。ただ同時にですね、学校の先生からすると正直大変かもなと思われます。自分の授業の時間に止まったら嫌だなとかですね。ただやっぱり、誰か学校の先生の中で味方がいたんじゃないかなと思うんですけども、どういう先生が味方をしてくれたのか、もしご存知でしたら教えてください。」

【阿部】「先生方の中にはやっぱり一部の授業が潰れて嫌だなと思う先生もいたと思うんですけど、私たちの高校の中ではそういう声は上がらな…まあ上げづらかったと言ったらアレなんですけど、もしかしたら上げづらかったかもしれないですけど、そういう声は一切出ず、どちらかというと、先生のための避難訓練



というのを伝えた時に、『あ、自分たちのためでもある。確かにそうだ』っていう共感の声を得ることができました。で、手助けを受けたというか、協力してくれた先生というのは、先ほどまでそこにいたんですけど、引率の先生が自分たちにメインで付いてくださって、そこから他の先生方に情報共有ですとか、あとは副校長先生がですね、生徒と学校とのこの活動を盛んに、結構コミュニケーションというか、盛んに活動をやっているという方なので、そこでこのお二人には結構助かってというか、手助けしていただいて活動してきました。」

【福留】「その他、いかがでしょうか？あ、チャットですか？じゃあチャットの方から、じゃあ岡田先生ちょっと要約というか抜粋で紹介お願いします。」

【岡田】「はい、オンラインの花巻市社会福祉協議会の佐藤様から質問が来ています。『大槌高校さんへの質問です。バイスタンダーズの立ち上げ理由、なぜ立ち上げに至ったのかを伺いたい』というのが来ています。」

【伊藤】「そもそも2人でやろうとしてたんですけど、運営する中で人数が撮影係とかケガ人役も必要で、人数が足りないなって思ったので、その人数を増やすために立ち上げました。」

【阿部】「少し補足なんですけど、もともとバイスタンダーズとして何かこれから活動をしていきたいというよりは、その時は今回の生徒創造型の避難訓練というものを行

うに向けて、まず先ほど言った人数が確保したい、そしてその生徒創造型避難訓練をもとにさらに活動したいということからバイスタンダーズというものを立ち上げました。」

【福留】「それではその他、会場の方からお願いします。はい。」

【岩手大学 山本】「はい、皆さんたくさんのいろんな活動をお聞かせいただきました。今日は本当に高校生がですね、違う角度からいろんな活動をしているということがあるので、教えていただきましてですね、非常に感心というか感動しております。で、本当はいろんなところで時間があつたらいくらかでも質問したいんですけど、ちょっとこしぱらくずっと関わってきたところがあるので、ちょっと釜石高校さんにお聞きしたいんですけど、我々岩手大学と結構もう5、6年ぐらい前からですね、釜石の伝承者を作り上げるっていうので、研修会とかだいぶご協力させていただいたんですけど、震災からもう14年っていうこともあって、伝承者の研修会も最初の頃はすごくたくさん研修会に来ていただいて、当時はきっとあなたたちの先輩の、釜石高校の高校生もその会場にいてですね、伝承者になられたという先輩もきつといたんですね。ただ、やっぱ何年も時間が経過していくと、参加している人がだんだん減ってきているなという印象をちょっと我々も受けております。ただ、それとは別にですね、こういう夢団ですか？こういう活動がまあ高校とはちょっと切り離す形で、地域に根差すことで、さらに代々受け継がれて、2019年からですからもう5、6年は続いているんですね？ですからそんな素晴らしい活動だと思います。伝承者とかも結局、後世に何があつたかを伝えていくってことで、きっと皆さん勉強していただいていると思うんですけど、今回その夢団の中の活動の2人で、加藤さんでしたっけ？最後2、3分語っていただいて、非常に、きっとその生まれた時はまだ震災の時の記憶はほとんどないと思うんですけど、それを新たにそういうものを学んで、しかもそれを伝えていくということがうまくいっていると思うんですね。で、こういうことってやっぱりどんだんどんだんたくさんの人が続けていた方がいと思うんですけど、それをチラッと出てきたインスタグラムが何かで、この活動を発信しているとかですね、ただ、恐らく今日のような活動も、この場だけだとなかなか続いていけないので、せっかくここに来て内陸の高校生と沿岸の高校生が交流したっていうので非常にまた経験が、新しい活動が生まれると思うんですけど、ここですることとか、そういうことをできるだけですね、発信していくことで記録を残して、そうすると5年後、10年後の高校生も、まあ5年前、10年前何があつたのかっていうのを引き継げると思うんですけど、その辺の活動がですね、特に釜石高校さんは

どのくらいその発信とかうまくいっているのかって、他の人たちにもぜひいいということで勧めてあげていただければと思いますので、その辺ちょっと教えていただければと思います。・・・じゃあPRどれくらいできてます？」

【山陰】「はい、発信といいますか、メリットとしてはやっぱりスライドでも紹介したんですけど、あの復興スタジアムで試合がある時に来場された方にコートで活動を通して発信するのがありますし、若い人は特にSNS、インスタグラムなんですけど、インスタグラムをまあ半強制的にフォローしていただいて、言うの忘れたんですけど、インスタグラムのフォローをちょっとしてもらって、活動の様子を見てもらったりしてますし、あと、まあ少し回答とはずれるんですけど、釜石市内でもその防災意識が高い人と低い人の差が激しくて、学校内でもそうなんですけど、そういう人たちに向けて、まあ夢団の活動を紹介する時に、学校内で、して勧誘する時にもやっぱり入ってくれる人が徐々に減ってきてるっていう問題もあったりしてて、やっぱり発信の仕方というのは、今までやってきたことも含め改善が必要なのかなと思いつつ、まあいいこともあったので、新たな発信の仕方といいますか、改善と新たな発信の仕方を今後見つけていく予定です。」

【山本】「はい、ありがとうございます。例えばこう語り部を2分とかですとね、その全部アップして、いろんな人が違う角度からいろんなことがPRできるっていうのもあれば面白いのかなと思いますけど。あ、ありますか？」



【加藤】「はい、えっと語り部は夢団内では、まあ全員でだいたい60名ほど夢団にはいるんですけど、語り部をしているメンバーっていうのは本当に5名ほど今、5名ほどなので、その内容が全員違うんですよ。だからその語り部をインスタグラムで発信っていうのは、すごいいい案だなと思うので、実際にやれるように検討してみたいと思います。」

【山本】「ぜひ、今後の活躍期待しておりますので。どうもありがとうございました。」

【岩手大学 越谷】「皆さんどうも発表ありがとうございました。最初にもう皆さんのパワーに圧倒されたというのが第一印象で、私のように歳を取ってしまうとなおさら

なんですが、頭でじっくり考えて、図面で、頭上で一生懸命考える前に体が動いてしまう高校生の力強さ。まさに皆さんだからこそできる活動を紹介してもらえたんじゃないかな、というふうに思います。あの最初の西和賀高校さんの話聞いていても、そもそもスノーバスターって行動そのものが実際、雪深くて結構雪重いですかね？西和賀は。そうすると、あの、あれですよ、あの数10センチとかって口で言うのは簡単ですけど、それをいわゆる、まあそれもなんですけど、それだけじゃなくて、その雪をよけるという作業だけじゃなくて、地域のコミュニティ作りを作っている。まさに地域力を向上させるという活動というふうに思えたんですけど、素晴らしい活動だなと思いました。で、まさに地域の力が作れて、よくなればなるほど、防災の力もついていくというふうに思いますので、ぜひ活動を続けていただいて、そういう形でですね、あの、土地内で続けられれば素晴らしいなと思います。それから宮古水産高校さんの話ですごく印象的だったのが、様々なことをされて、直接的に海の恵みに接することが多いんですよ、食品もそうですけど。そういった中で普段ってというのは、まあ海は、どちらかと言うと恵みを与えてくれたり、風景からきたのもあって人が集まる、呼べるものですけど・・・、だけどもひとたび牙をむくと、それは恐ろしいです。だからどうしようっていう、めったに起きない災害だからどうしようってすごく悩むところではありますけど、その両方の視点が大切だと思ってですね、自然って一方的に怖いものではなくて、私たちはその中で生きていくという視点でお話しをいただけたんじゃないかな、と。そういうことを活動の中で実践されているんじゃないかなと思ったので、あの生かしてもらえんというか恵みを受ける、えっと脅威になりますね。両面から考えを進められてたのか、発展された素晴らしいなと思います。それから大槌高校さんのパイスタンダーズ、まだできたばかりだから人数が少ない、ということもあるかもしれないですけど、訓練の本質をついたのかな、避難訓練。シナリオができていて、台本があって、台本を順番通りに読み上げると訓練が終わったあと『今日の訓練完璧』って思うんですよ。それが訓練かもしれない。訓練って本来は『あれ？これちょっとまずかったんじゃない？』例えば車椅子がどこにあるかみんな知ってたのと、たまたま知ってた人がいたからよかったかもしれない。だったらみんなが知ってるか、本当に。そういう問題点を見つけられるというのが、逆に訓練の良さかもしれない。もちろん基本的にやらなければいけないスタンダードっていうか、普段やっている訓練が悪いと言ってわけではないんですけど、そういったことを基礎的なことはやらなきゃいけないけれども、やはり災害って想定外って言うけど、予想できないことが起きるから災害になるので、それが起き得る

んだっていうことをあらかじめやれる訓練、素晴らしいなと思ったんで、また是非、いろんなアイデアを工夫して考えていただければと思うんです。それから夢団の釜石高校さんのお話。最初に言ったのが印象的だったんですけど、『東日本大震災を伝える最後の世代』というなんていうか、自覚の高さというか、まずそこに圧倒されてしまったんですけど、でもさまざまな活動をされていて、本当に、実際大変難しい中で、自分たちだって何も知らないじゃないかということを、今起きた現場にまで足を運んで、交流まで取ってっていう、あるいは語り部活動なんていうのは、もう、本当に素晴らしい内容だと思いました。ぜひ、そういった気持ちを忘れずにやっていただければと思います。皆さんのこういった活動がこうしていくこと自体が、皆さん自身の成長にも繋がり、それがどんどん外に繋がって広がっていけば、いろんな輪ができていくんじゃないかなと期待させていただけるような発表かなと思いました。すみません、ちょっと感想ばかりで申し訳なかったですが、素晴らしい発表をありがとうございました。」

【福留】「どうもありがとうございます。いろいろとコメントや質問があったと思いますが、逆に壇上の高校生の皆さんから会場の人に聞いてみたいとか、質問みたいなのって何かありますか？もしあれば自由に1人か2人、問いかけてもらえればと思うんです。どうでしょうか？こんな活動をやって、まあね、さっきどうやってメンバー増やすかって話ありましたけど、そういったものを含めてこう高校生ではこんなやってるんだけど、できたらちょっと年配の人のアイデアが欲しいとか、実際、高齢の人はどんな行動なのかみたいな形でちょっと尋ねてみたいことがあれば、ぜひ。はい、お願いします。」

【山陰】「はい、せっかく大学に来たということで、大学の先生方に質問なんですが、大学では災害訓練などのようなことはどうなっているのでしょうか？」

【福留】「避難訓練に大学の先生が関係しますか？と。」

【山陰】「ああ、大学自体で関わっているかと。」

【福留】「ああ、かなり広いアレだと……どなたにお答えいただきましょうか？じゃあ、はい、お願いします。」

【山本】「そうですね、たまたま情報を、今年の情報を仕入れているんで、恐らくですね、その皆さんのようなこの特に大槌高校さんのようにですね、いわゆる内容を隠してやるような避難訓練というのは岩手大学というのは、まあ行っていないですね、残念ながら。で、まあ恐らくやるべきかなという気はしますけど、最



近はですね、ネットワークの攻撃的かなんかに対して、この間のどこかで危ないメールが来るよって、そういうような訓練をやってるんですけど、具体的な本当に災害とか火災とかによる避難訓練は完全に出来上がった形ですね。その何月何日に、残念ながらですね、岩手大学は全体でやるというよりはこの学部が今5学部なんですね。で、今年は理工学部のみです。で、理工学部の中のどこかの建物が避難訓練を、特に火災の防災訓練をやりましょう、ということを決めて、実際に放送を流すんですけど、恐らくなかなか大学の学生も先生もですね、参加する人の方が少数というのが現状です。ですから、そういう意味ではもう高校生の方がはるかに活動的で正しい訓練をやっていると思います。」

【福留】「ありがとうございます。正直、大学によってもかなり訓練準備というか、作り込みとか、今、山本先生が言われたように、教員とか学生の関わり方もすごく熱心に行っている大学もあれば、まあいた人だけが参加してるみたいなのもあって、結構温度差があるのは事実だと思います。はい、その他いかがでしょうか？あ、お願いします。」

【阿部】「自分事で、自分のことに対して質問なんですけど、先ほど自分で、自助と共助のバランスにめっちゃめっちゃ困ってるって話をしたんですけど、大学の先生からしてみるとやっぱ教員という立場から、自助も大切だって思う気持ちも分かんんですけど、簡単に言うと自助と共助のバランスどう思いますか？っていう質問なんですけどいいでしょうか。」

【福留】「はい、あの非常に重い課題だと思いますけれどもどうでしょう？もしよければ、本山先生や南先生に一言お考えをいただければと思います。」

【本山】「教育学部の本山と申します。安渡町内会の新入りメンバーです。そういう意味で、今日のスライドの中にも佐々木慶一さんのお話、あと写真もありましたけれども、自助と共助のバランスをどう取るのかを安渡町内会でものすごく真剣に考え、取り組まれているから、今、そういうものをお考えなのかなというふうにも感じます。なのでやっぱり誰かを助ける人が犠牲になってはいけないよな、というのは、やっぱりその自助・共助を考える上では重要な問いかなと思うので、やっぱり共助にはまあ万能ではない、だからこそやっぱり自助が大事なんです。でも、やっぱりご高齢の方のお話もありましたけど、やっぱり自助ではどうにもならない人がいる時にどうしたらいいのかというのは、正直、私も明確な答え自体はありません。っていうのも、私も先月末に佐々木慶一さんのお話を今年も伺ったんですけれども、やっぱり助けてもらえるための自助っていうのもあるんだろうな、ということも感じましたし、安否札、今日もいただきましたけれども、これを出すことで助ける、助けようとする人がより助かる可能性も高まるということなので、やっぱりお互い組み合わせることで、みんなが助かる可能性は高まるんだろうな、という気がしています。なんか感想になってしまいまして、私も今、ちょうどその同じ思いを共有してますよということでコメントさせていただきました。」

【岩手大学 南】「理工学部の南ですけど、あの本当に大事な大事な問いが、岩手の学生さんから出るんだと思うんですけれども、それほど安全をテーマにしているところがあるんですけど、まず自助で自分が助からないとダメっていうのはそう、必ずそうだと思いますね。その時にただ、自分のまあ子供だったり、皆さん逆かもしれない、自分の大事な母親だったり、を見る時にそれを置いて、てんでんこの考え方ですけどもね、置いて逃げる。それがてんでんこ以上なんだけど、本当にそれができるかっていうのはあって、もし自分にとって命より大事な、皆さんからの親は、あなたたちのことをそう思っていると思います。自分にとって命より大事な人が目の前にいた時に、助けないことができないはずだし、それはもう自助と共助が一緒になった、一緒になっている状態。自分の命をそこにかけても一緒に逃げたい。そういう時に、共助ってね家に戻るだとか、それはもはや自助。もはや自助。自分の、自分自身の命だから、目の前にあるのは。それはそういうことはあると思う。だから皆さん、東日本大震災を手本として考えようとした時に、まあそうした究極の自助というものを大事にしていってほしいと思う。共助っていうのは、まだまだどうしたらいいか分からない。簡単に『人を助けましょう』なんて言えないですよ。その人の命を失うかもしれないから、と思います。ここまでしか

言えないけどね。本当にありがとうございます。こんな素晴らしい若者たちがいるっていうのは沿岸の宝だね。岩手の宝だと思います。ありがとうございます。」

【福留】「どうもありがとうございました。あの今みでの通りとお二人の先生の中でもなかなか明確な解が得られないというか、それぞれの先生なりに探している、模索している段階なんで、皆さん一つの考え方として聞いて、皆さんなりにまた突き進めてもらえればなと思っています。」

じゃあそろそろ時間ですので、最後に壇上の皆さんそれぞれからですね、今後の活動を展開していくにあたって、防災とか、あともっと広い意味で、皆さん結構今日発表してきて、すごく個人的に思ったのは、自分の地域がまず好きだっていうことを紹介していることがあったと思うんですけども、地域に関わる、地域づくりをしていく上で大切だと思うこと、皆さん自身が大切にしているということ、今後もそれにこだわっていきみたいみたいなことを、西和賀高校さんの方から一言ずつ言っていただければと思います。じゃあお願いします。」

【高橋咲】「スノーバスターズの取組でもあったように、やっぱり雪による災害も西和賀町は多いと思います。なので、スノーバスターズの取組も大切にして、活動の中でその感謝、日頃の感謝を忘れず、高齢者の方々の安否確認や引きこもり防止などの防災もしながら、これから取り組んでいきたいし、この思いも後輩たちに引き継いでいけたらなって思っています。」

【福留】「ありがとうございます。」

【高橋奈央】「先ほど言ったように、このスノーバスターズの活動はとてもメリットがすごく大きいし、影響力のある活動だと思っていて、私たち高校生だから、やっぱり雪って重いし、今私たちより60代とか70代とかっていう方々が多いんですけど、やっぱり私たち高校生だからこそ、もっと私たち高校生が活かせる活動だと思うので、この活動をいろんな人に広めたいし、町の人だけじゃなくて、実は私がやっている地区では毎年、去年だと盛岡とか沿岸とかからも実は助っ人の方がよく来てくれているので、もしよかったらこの会場にいる人たちもぜひ、結構人手がやっぱり足りないところが多いので、時間があつたらぜひ参加してもらえるとすごくありがたいなっていました。」

【福留】「ありがとうございました。」

【三上】「はい、自分たちの住んでいる地域は雪とか土砂とかもあまり少ない、他よりではなくてだから本当に、あるとしたら地震とそれから津波と火事とみたいな感じなんですけど、その他と比べて津波とかってあんまりこうめったに起きるものじゃないので、自分も3歳の頃の記憶だし、全然経験とかもなくて、何もわからない状態だから、実際被害に遭った人たちとかの話聞いて、手探りで自分の中で何かしら誰というか目標を見つけて地域のために行動を起こしたいと、今回の会でとても思いました。」

【菅原】「さっきも言った通り、私は岩手県じゃなくて秋田の方の出身なので、地域のために何ができるかという答えを、あまりまだ具体的には出てないんですけども、やっぱり津波を経験しない側からすると、その怖さがあまりわからないというのが、逆にそっちの方が怖いというのもあるので、実際に津波の伝承館に行った時もあるんですけども、被害の、亡くなった方の数だとか、亡くなってはいないけど被害を受けた方だとかの数をみると、本当に自然が牙をむいた時は本当にすごいパワーになって、人では到底太刀打ちできない力があるので、それに、立ち向かうんじゃなくて、自分が生き延びるためにどうすべきかというのを、防災訓練などを通して学んだことを新しい世代の人たちにも受け継いでいくことで、少しでも悲しい思いをする人を減らしていきたい、減らしていければと思います。」

【伊藤】「私たちの住んでる地域は防災意識にバラつきがあって、まずは子どもたちの防災意識を高めようということで、そのために今回私たちが行った避難訓練を後輩たちが引き継いでいくのももちろんですし、その子どもたちで防災についても重いものと考えているっていうのを、釜石高校さんも仰ってたんですけど、そのために自分たちの地域もゲームとかで防災意識を高めて、子供たちの防災意識を高めて、そこから親に伝えていって、地域の人に伝えていくのが大切なんじゃないかなと思いました。」

【阿部】「ちょっと質問の主旨とちょっと合わないかもしれないんですけど、防災とか復興とか、地域活動とか、それ以外にも当然考えられるのがやっぱり、この世代だけじゃなくてみんなのやる気というか、これに対して熱意を持ってやるかっていうことだと思って、自分も高校入ってきて、一年生の時に探究的な活動って始めて、その時は防災についてやるとは一切思ってたんですけど、きっかけは何でもいいんですけど、何かに一つにこう目的をみつけた時に、それに熱を持ってやれるかっていうのは、やはり何に対しても大切なことなのかなって思っているんで、それを私だけが思うだけじゃ

なくて他の人も思っしてほしいし後輩とか更に下とか、逆に上の方とかにも思っほしいなと思います。」

【福留】「ありがとうございます。では夢団の2人お願いします。」

【加藤】「はい、私たちの発表の中で、震災の記憶がある最後の世代ってお話をしたんですけど、私たちの代で夢団の活動は6年目になるんですけど、これまで活動は繋がってきたと思うんですけど、私たちが卒業して来年度入ってくる新入生の子たちから下の代は本当に全くない。0歳とか生まれてない代になってくるので、その子たちが私たちの活動をつないで、どう伝えていくかっていうのが、私たちの今考えるべきところではあるなと思うので、そこについて、どう後輩に伝えていって繋いでもらうかっていうのを、これから考えていきたいなと思います。」

【山陰】「はい、まずやることは、今回のこの会で学んだことを聞いたもので終わらせるのではなくて、自分たちの活動に取り入れて、どんどん繋いでいくってことが一番重要だと思っています。先ほども記憶が風化するっていう話をしたんですけど、今祢音さんからもあったと思いますが、次どんどん代が下になっていくにつれて、震災を経験してなくて、やっぱり怖さを直接知らないっていう人が増えてくると思うので、発信する側の夢団の中でもしっかりと、上の代から下の代へどんどん記憶を繋いでいって、繋がってきた記憶をまた別の人に繋いでいくっていう、その連鎖をうまくやっていくことで、地域全体としての防災意識を高められていくんじゃないかなというふうに思っているんで、このコミュニティの繋がりにっていう部分も、どんどん強化していって、命を守るための活動なので、全員に関わってほしいなと思います。」

【福留】「どうもありがとうございます。まだまだ高校生の皆さんの考え方を伺いたいところなんですけれども、第2部もそろそろ時間が迫ってまいりましたので、この第2部の最後のところということで、お二人の先生から総括的なコメントやメッセージをいただきたいと思います。それでは最初に教育学部の本山先生の方からお願いします。」

コメント

コメント

岩手大学教育学部附属教育実践・学校安全学センター 副センター長 本山敬祐
岩手大学地域防災研究センター センター長 小笠原敏記

【本山】「まずは、岩手県にはこんなにかっこいい高校生がいるんだということをすごく嬉しく思いました。本日のテーマにある地域防災・復興、岩手県で言う『いきる・かかわる・そなえる』が共通のキーワードになっているかと思います。この3つのキーワードは東日本大震災の経験を経て、岩手の復興を支える人づくりを考える時にこれが大事だよと考えられて出てきたものです。そういう意味では、沿岸部というイメージが学校の先生にも強いものかもしれませんが、本日のフォーラムで私自身も『いきる・かかわる・そなえる』の裾野の広がり、あるいは本質的なところをたくさん学ばせていただきました。特に西和賀高校のお二人からのご発表から、『復興教育は内陸部にもちゃんとある』ことについて、自信を持って広めたいと思います。自然災害のなかでも三陸地方では津波が何十年に一回かやってきて広い範囲で甚大な被害がもたらされるものに対して、雪害では局所的であれ毎年必ず発生しています。ただ、雪害も命にかかわる重要な問題であるということで、地域防災で大事な対象になるということです、それに皆さんが関わってこられた。この『かかわる』ことで『そなえる』に繋がることを実感されていることだと思います。また、宮古水産さんのように、宮古市の訓練に『かかわる』ことで『そなえる』についても学ばれている。また、西和賀高校さんと宮古水産さんの『かかわる』によって、雪も貴重な資源になるんだと気づき、そしてまた海に対する観光資源としての捉え方や、自分の地域に対する見方が変わっているという、やっぱりこの『いきる・かかわる・そなえる』からの学びなんだなと感じました。また、大槌高校さん、釜石高校さんのように、いろんな地域から、またいろんな世代と『かかわる』ことによって、じゃあ自分たちでもこういうことをやってみようよと新しい価値を生み出していたり、ゲームという形によって過去の教訓を学び、それを伝えていっていらっしゃる。これはやっぱり『かかわる』、『そなえる』に繋がると感じました。最後にもう一つ、また『いきる・かかわる・そなえる』に戻ると、この本日ご発表いただいた内容やこれまでの活動が皆さん自身の『いきる』にどういう意味を持つのかをぜひ掘り下げていただきたいと思います。今日のパネルディスカッションの中でも、どんなことが身につきましたかという質問やお話がありましたが、改めてこれが自分にとってどんな意味を持つものなんだろうかについて深掘りしてほしい。それが岩手なら

ではの学びに繋がるような気がします。それぞれのご活動の中で、自分にはどんないいところがあったかなとか、どんな強みを発揮できたのか、あるいは新しく見つけられたか、自分が心を燃やせることは何なのか、どういうことを自分が幸せに感じるんだろうか。それはやっぱり人との関わり、あるいは自然との関わりを通じて、初めて見えてくるような気がします。先ほどのご質問にもありましたけど、やっぱり自助と共助のバランスは難しい、でも、それを考える自分ってどういう存在なんだろうということです。恐らく同じ避難訓練をやって、同じ安渡町で生きていたとしても、それを皆さんが同じように考えるとは限らないと思うんです。でも自助と共助のバランスが大事だと思う自分って一体何を大切に生きていきたいのか、そこにこそ、これからの皆さんの生き方を支える大事な考え方だったり、大事な支えになるものが含まれている気がします。コミュニケーション能力が身についたというのもそうですし、人との繋がりが嬉しいなと思ったら、それこそがきっと将来、皆さんの生き方を支える力になると感じています。そして、その生き方という点では生徒が考える避難訓練が面白いと思います。やらされ続けていることについて、これは本当に意味があるのと思ったことに対しては、自分たちでやってみればいいじゃんっていうのは、ものすごく大事な生き方じゃないかなと思います。学校の中でもやらされることがたくさんあるかもしれませんが、それに対して文句を言うだけでなく自分たちで価値を生み出していく。それはどの高校生の方にもぜひチャレンジしていただきたい気づきだと思います。さらには、生徒による新しい価値の提案が大人の学びにもなったということで、高校生は意欲も知識も知恵もありますから、やりたいと思ったことはどんどんやってほしいと思います。そのやりたいという思いに応えてくれる大人が学校内外に必ずいます。学校の先生もそうですし、夢団を応援されている伊藤さんや常陸さんのように、皆さんの声に思いに応えてくれる大人が必ずいます。卒業後もきっとそういう方はいると思うので、ぜひ皆さんのやりたいことを大事にして、それが岩手の誰かをより幸せにする何かに繋がってほしいと願います。本日は本当にありがとうございました。」

【福留】「ありがとうございました。では続きましてセンター長の小笠原先生からお願いいたします。」

【小笠原】「お疲れさまでした。今日の発表に対して多分相当準備されてきたのかなって、非常にいい内容の発表だったと思います。で、あまり長くはしないですけど、多分ここに参加された生徒さんたちが防災意識とか、そういう非常に意識の高い子たちなん

ですね、多分。なので、それをですね、いかにこう周りに広げていくか、そこが大事なのかなという気がします。ぜひこの活動を後輩とか友達とかに広げていってくれたらなと思います。本当に今日はお疲れ様でした。」

【福留】「どうも小笠原先生ありがとうございました。それでは時間になりましたので、ここあたりで、この第二部パネルディスカッションの『高校生が考えるこれからの防災・復興活動』を終わりたいと思います。この壇上の高校生のいろんな活発な発言、また会場の皆さんとのやり取りをここまでにしたいと思いますので、盛大な拍手で終わりたいと思います。どうも皆さんも参加ありがとうございます。」

閉会挨拶

閉会挨拶

岩手県教育委員会事務局学校教育室 産業・復興教育課長 佐々木宏幸

【坂口】「それでは閉会の挨拶とさせていただきます。閉会の挨拶は岩手県教育委員会事務局、学校教育室、佐々木宏幸産業・復興教育課長よりお願いします。」

【佐々木】「皆さんこんにちは。岩手県教育委員会事務局の佐々木と申します。閉会にあたりましてご挨拶ということで感想も含めて、ちょっと長くなるかもしれませんがご容赦いただきたいと思います。東日本大震災津波発災から14年以上経過しまして、当時の記憶・経験・教訓といったものの風化が懸念されております。また日本海溝・千島海溝沿いの巨大地震の発生が想定されております中で、皆さん高校生たちが復興あるいは防災活動に取り組まれているということで、まさに今回のタイトルにもあります『次世代が考える新たな災害文化』の創造というところに繋がるものであると考えております。今日は、第一部の活動報告の中で4つの高校の皆さんから、地域との繋がりを持ちながら、また、各学校の特色を出しながら地域で実践されている防災活動についてご紹介いただきました。大変実践的でかつ楽しみながら学習活動に取り組まれているという様子がよく伝わる報告だったと思います。

まず西和賀高校の皆さんからは、スノーバスターズの活動ということでご紹介いただきました。単なる除雪活動にとどまらず、高齢者の方々の見守りなどといった地域コミュニティの形成ということにも繋がっているなと感じましたし、全校生徒の4割以上の皆さんが参加しているということで、まさに共助の精神が根付いている証しであるなと感じました。

2番目の宮古水産高校の皆さんから、内陸との学校の交流による防災学習、それから避難訓練などの取組についてご紹介いただきました。固形燃料づくりですとか、災害時を想定した非常食の調理実習など、実践的な活動を通じて、防災への意識を高めるだけではなく、様々な種類の災害を想定した、様々な防災訓練への参加を通じて、災害対応力の強化、それから地域を支える力というものが養われているんだな、ということがよくわかりました。

それから大槌高校の皆さんからは生徒創造型の避難訓練ということでご紹介いただきました。地域のみならず、全国あるいは世界にも目を向けた一連の探究活動を通じて、共助の重要性というところに着目されて、「バイスタンダーズ」によって生徒さんが自

主的に企画運営された、いわゆるブラインド型の訓練ですが非常に実践的な内容となっておりまして、安渡地区の教訓を踏まえた内容というところで、生徒の皆さん全員の防災意識の向上に資する大変有意義な取組であると感じました。

それから最後の釜石高校の皆さんの発表ですが、自主的に結成された「夢団」という組織団体による、震災を知る最後の世代の記憶を次世代に伝えるための取組ということでご紹介いただきました。また、能登の研修を通じて被災地の現状を体感し、コミュニティの大切さ、あるいは当たり前のありがたさといったものを学ぶ姿勢に深い感銘を受けました。そして最後にご披露いただきました「語り部」も、非常に素晴らしかったと思います。

それから、第2部のパネルディスカッションにおきましては、皆さん積極にご意見を交わしていただき、復興防災活動に取り組まれているお互いの思いを知りながら、より自分事として捉えるという良い機会になったのではないかと思います。皆さんが地域防災の取組を通じた学び、あるいは気づきというものを地域社会で実践され、さらに地域あるいは関係機関との連携を強化しながら、ご自身の将来の夢の実現に向かって進まれることを切に願っております。本日の活動報告、またパネルディスカッションを聞いておりまして、岩手の復興教育の成果として、子供たちが地域あるいは人々の温かさを感じながら力強く育っているということが改めてよく分かったところです。県教育委員会といたしましても児童生徒一人一人に寄り添った支援というものを継続しまして、震災の経験・教訓を風化させることなく、震災後に生まれた子供たちなどに確実に引き継いでいく取組を推進していくとともに、児童生徒の発達段階に応じた防災教育を通じて、防災に関する知識、あるいは様々な自然災害の発生時に主体的に行動する力の育成に力を入れてまいりたいと思います。今後も、『いきる・かかわる・そなえる』という3つの教育的価値を育む「いわての復興教育」に重点的に取り組んでまいりますので、関係の皆様のご協力ご支援引き続きよろしくお願い致します。最後になりますが、本日のフォーラム開催にあたりご尽力いただきました関係者の皆様に心から感謝を申し上げまして閉会のご挨拶とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。」

【坂口】「本日のフォーラムが、まさに高校生の取組に光を当ててきたんですが、それはイコール東日本大震災が来年で15年。もう15年、されど15年なんですね。その15年の岩手の復興のプロセスの一端を浮き彫りにする、そんなフォーラムだったのかなと改めて考えさせられました。

以上をもちまして、第31回岩手大学地域防災フォーラム『いわて発高校生による地域防災・復興～次世代が考える新たな災害文化～』その一切を終了とさせていただきます。本日オンラインでは静岡、そして青森からもご参加いただいております。ご来場の皆様、そしてオンラインから参加いただきました皆様、ありがとうございました。以上をもちまして終了となります。なお、最後に、皆様アンケートへのご記入の協力をよろしくお願いいたします。それでは終了となります。

最後に一つだけ、本日ご登壇いただきました高校生の皆さん、記念撮影を行いますので、この後、改めてもう一度こちらに戻ってきてください。それでは以上をもちまして終了となります。皆様、お忘れ物のないよう、そしてアンケートにご記入いただきまして、お帰りいただきますようによろしくお願い致します。本日は誠にありがとうございました。」





岩手大学地域防災研究センター
第 31 回地域防災フォーラム

いわて発 高校生による地域防災・復興
～次世代が考える新たな災害文化～

発 行 2025 年 10 月 31 日

編集・発行 岩手大学地域防災研究センター
〒020-8551
岩手県盛岡市上田 4-3-5
TEL 019-621-6448
<https://rcrdm.iwate-u.ac.jp/>

印 刷 杜陵高速印刷株式会社

(公財)トヨタ財団 2022 年度国内助成プログラムの支援を受けています

